独逸日乗

本稿由来
ドーハ／カタール
異境の朝
マックス･プランク研究所
最初の週末に――海外における日本および日本人考
Lübeck――ハンザ同盟と北ドイツ
ドイツで行雲流水の生活は可能か
港まちキール
森のドイツ
研究所、大学、アカデミック
ドイツへの片思い
ドイツ人の日本人観
エコロジー
鷗外のこと
ベルリン
ドイツの鉄道
湖畔驟雨（創作）
跋

本稿由来

ロンドン五輪のあった 2012 年の夏、アイントフォーフェン工科大に 2 ヶ月滞在していた。その次第は『平成・阿蘭陀風説書』にものした。もうこんな具合にフラフラ外に出かけて歩くのはこれが最後になるだろうと書いた。その 2 年前の 2010 年夏はキャンベラのニューサウスウェールズ大にやはり客員で 2 ヶ月滞在した。その折りの『入豪求法巡礼行紀』にも書いたけれど、海外に出るとなぜか必ず尖閣やら竹島やらを巡る騒擾が持ち上がり（今回は是非そうならないことを願うが）、それやこれやで国力退潮を一貫して悲観的に感じている私が思うに、唯でさえ社会的な無駄飯喰いの身が、のんきな遊山気分もって客員教授に出掛けていくことなど許されなくなると感じたからか――。それもある。が、それよりも、大学内での仕事に寧日なくなって、そもそも物理的時間が外に出かけるのを許さなくなるだろうと考えていた方が理由としては大きい。ところが、幸いと云うべきなのだろうが、そうはならなかった。ありがたいことだと思わねばならない。結句、もう一度、外に出掛ける機会に恵まれたわけだ。また五輪の年である。

日本人には殆どなじみのない Plön にあるマックス･プランク研究所（こっちは高名だろう）――理化学研究所（理研）のような組織でドイツにいくつも専門分野の異なる研究所がある――進化生物学研究所の Arne Traulsen 教授が 3 ヶ月間のホストをしてくれると云う。Traulsen 教授は、進化生物学で最も著名なハーバード大の Martin Nowak 教授が主導するファミリーでは綺羅星のような存在である。彼は、進化ゲーム理論の提唱者の一人である Karl Sigmund 教授のもとウィーン大学で、また Sigmund 教授の弟子筋に当たる Nowak 教授のもとでポスドク修行後、ドイツにおけるアカデミアの一大淵叢（えんそう）であるマックス･プランク研究所で、非常に若くしてフルタイトルの教授職に就いた。それだけでも才能一通り出ないことが知れよう。数理を縦横に使った理論アプローチの鋭さは、私のようなしがない計算機使いには逆立ちしても到底及ばない。彼を紹介してくれたのは、総合研究大学院大学の大槻久博士である。大槻先生は Nowak 教授の下でポスドク修業をしていた日本の数理生物学界の若きエース。故に、Traulsen 教授とは昵懇の仲である。大槻先生を介して、Traulsen 教授に連絡すると、おまえの論文はよく目にする、是非来るといい、歓迎すると返事が来た。あるいは査読にでも回っていたか――愚作の悪評が気に掛かる。Nowak 教授が私と同年 1965 年の生まれ。Traulsen 教授も大槻先生も私よりずっと若い。学問の世界は、国籍性別キャリアや身分門地、ましてや年功序列（ついでに何大のどこどこ研出身か）など一切関係ない（この通則が成立しない分野は科学でないのは無論のこと、そもそも学問とは呼べないと諒解されている――当然である）。出来る奴かボンクラかが、或いは、よい論文を書いているか産業廃棄物モノの駄作連発か、はたまたそれすら書いていないかが（驚くべきことに日本では分野によって「書かず」がまだ許されている――むかし揶揄を込めて学者馬鹿と云ったが、これでは唯のバカである）、他者の尊敬を受けるか軽蔑に甘んじるか、はたまた無視

されるかを決める。だから、何とも思わないし、彼らに伍そうなどハナから烏滸僭上の沙汰とよく承知している。粗製濫造の薄っぺらな論文を生産し続けている自らを弁えている。却って外交辞令が痛い。冷汗三斗である。

兎も角、7 月から 3 ヶ月間、滞在費はドイツのアカデミー（German Academic Exchange Service; DAAD）の、往復交通費は日本学術振興会の負担で、Plön に出掛けることになった。

さて、その Plön だが、北ドイツの Schleswig-Holstein 州の田舎町である。乳牛のホルシュタインの Holstein である――ここらは、領有問題を巡って 19 世紀にシュレースヴィヒ（Schleswig）公国とホルシュタイン（Holstein）公国との間で 2 度紛争があったデンマークとドイツとの間の歴史的係争地であった。現在の人口 8700 人というから邑（むら）というべきか。旧東西ドイツの国境に近く、ベルリンから特急で 1 時間 40 分ほどかけてまずハンブルグに至る。そこから地方幹線に乗り換えてリューベックへ、そのリューベックとキール（U ボートの基地として有名だった――そして Max Planck 博士の生誕地でもある）を結ぶまったきローカル線の途中にあるのが Plön である。ベルリン中央駅から乗り換え二回で 3 時間 40、50 分ほどかかる。湖に囲まれた大変美しいところだ。このあたりは――そのうち触れるだろうが――ハンザ同盟の故地であり――さきほど出たリューベックはハンザ同盟の中心地だった――Plön にも古い城跡――と云っても、時代はもっと新しく、17 世紀、例のドイツ 30 年戦争の折りに Schleswig-Holstein 公爵の城館として建てられた――が残っている。が、観光ずれしてないから、訪れる人も少なく、そもそも「地球の歩き方」の類書にも一切紹介されていない。かつて悪名高かったジャップツアー、今様ならシナ爆ツアーだろうけれど、それら団体客にも荒らされていない。

本稿のタイトルだが、悩んだ末、『独逸日乗』とした。日乗は、永井荷風の『断腸亭日乗』をひくまでもなく、日記の意である。

――『断腸亭日乗』ついでの余談。ひと頃、調べ物がてら戦時中の日記を読み比べたことがある。『断腸亭日乗』はじめ、徳川夢声の『夢声戦争日記　－敗戦の記－』、山田風太郎『戦中派不戦日記』、高見順『敗戦日記』、大佛次郎『終戦日記』、清沢洌『暗黒日記』、細川護貞『細川日記』など等。どれも当時から高名な文士、芸人、のち作家（当時医学生――山田のこと）、記者、首相秘書官の手になる日記だから読み物としてもおもしろいのだが、たとえば、昭和 20 年 3 月 10 日にあった例の東京大空襲の折り、各人は一体どこで何していたか、そしてその顛末をどう書いているかを同時代資料として比較して読むと、実におもしろく、興味つきないのだ。一面の焼け野原になった錦糸町界隈を見て、夢声は「金庫というもの、意外に多きもの、これだけは頑固に焼け残りて、物欲の墓石の如し」と言っている。けだし凄惨な風景であったろう空襲跡も、弁士漫談家としての彼の目の付け所によって一場のユーモアになっていて、救いを感じさせる。散文詩的な文学表現は、実際を知らぬわたしに焼け跡が前衛芸術のオブジェのようだったかの如き想像をかき立てる。一体、金庫はいくつあったのかしら・・・。

『私編･独逸日記』なるタイトルも考えた。いうまでもなく『独逸日記』は、鷗外が 4 年

の在独留学期間中の日記である。日清戦争後に「左遷された」ことになっている第 12 師団軍医部長時代の『小倉日記』とともに、筑摩から出ている森鷗外全集 第 13 巻に納められている。が、文学史上の巨星に対して、あまりに礼を失すると思い、結句、やめた。いずれ鷗外には触れることになるだろう。

（Jun.30.2016）

ドーハ／カタール

今回はカタール航空で羽田からベルリンへ飛ぶ。

ドーハが経由地である。最近よく耳にするだろうカタールの首都で、人口 130 万余。その多くがインド、フィリピン、ネパール、パキスタン、スリランカ、バングラデシュからの外国人労働者である。2020 年オリンピックを東京と最後まで争い落選、一方、2022 年の FIFA ワールドカップの開催地である。そんなことより、人口に膾炙するのは、例のイスラム国に関連する報道ソースとしての衛星テレビ局アルジャジーラの本拠地としてかもしれない。あるいはカタールと聞いて、隣国のバーレーン同様、昨今、ケニアからの陸上選手を大量に召し抱えて帰化させ、結句、成し遂げたメダルラッシュでもって、世界の中長距離陸上界を席巻していることを思い出すか。額に汗したと云うより地面から湧き出るアラブならぬアブラを右から左に売っているだけの、にべもない言い方をすると、父祖伝来の不動産収入でもって、人もうらやむような豪奢な生活をしているだけでもどうかと思われるのに、今度はそれでもって人買いの挙げ句、金メダルまで買うつもりかとの謂いだろう。オリンピック憲章もアマチュアリズムも所詮は建前であって、カネがすべてを決するとのモダニズムが行き着いた究極の物質主義的価値観に今さら文句たててもはじまらぬ。野暮は言わぬがいい——考えてみればプロスポーツだってその原理で成立しているじゃあないか。やっかみもわかるが浅薄な非難は当たらない。

カタール／ドーハの玄関——ハマド国際空港は最新設備を備えた空港として 2014 年に開港した。なるほど素晴らしいハブ空港の設備だ。

カタールとその首都ドーハといえば、今でこそオイルダラーで沸き返る、観光から遊興でもって世界中の人々を引き寄せて已まない——途上国の人には就労の機会をあたえてくれる富裕の国、沙漠の中に突如出現した金ピカのまちと云うイメージだろうが、古くからそうだったわけではない。

第一次世界大戦は、欧州の政治指導者がかつて経験したことのない、国民や国家全てを動員する総力戦になった。欧州の人々にとってみても初めての経験であり、戦争の様相はこれまでの当事国同士の地域的紛争といった枠を軽々越えた、まさに世界大戦へと発展する。参戦各国は口約束やら秘密の空手形やらを乱発して欧州外の国や民族を巻き込もうとした。英国はインド兵を戦場に送り込んだだけでなく、よく知られるように、アラブ人とユダヤ人との間に相互に矛盾する約束——所謂、「イギリスの三枚舌外交」と云われる——を交わした。枢軸国の一角オスマン・トルコを何とか切り崩そうとの策である。これが現在に至る中東問題の元凶となった。映画『アラビアのロレンス』をご記憶の向きもあろうが、英国はオスマン帝国からの独立を目指すアラブの反乱を扇動し、ついでに自国の帝国主義的利権の拡大をはかる。英国の石油メジャーが今日存在する理由がここにある。流石に帝国主義の卸問屋にして老舗だけのことはある。ヨルダンからバーレーン、カタールさらにはオマーンに

至るペルシャ湾岸の地域に対して、英国はその庇護の元にベドウィン諸部族の酋長たちの権利を認めて独立させると約束する。戦後の 1916 年、英国はカタール首長アブドゥッラー・ビン・ジャースィム・アール＝サーニーの自治権を認めたが、周辺他地域同様、実際は保護領であった。そうこうしているうちに、第二次世界大戦の最中、1940 年にカタール半島西岸で高質の原油鉱脈が発見される。しかし、ドーハを積み出し港とする原油輸出が打出の小槌となるのは大戦後のことだ。1968 年に英国がスエズ以東から撤退すると表明、ここいらの小首長領は大同団結して連邦国家を作ろうとする。現在のアラブ首長国連邦（UAE）である。しかし、カタールとバーレーンは、結局、参加を断って単独で独立国となった。カタールの独立は 1971 年である。イスラムで Sheik――首長と訳される家系はサーニー家が世襲しているが、親子間でも必ずしも禅譲というわけでもなく、親父の不在中に倅がクーデターを仕掛けて首長を襲名するとのゴタゴタをこれまで何度も繰り返している。が、別に国家運営に深い智慧やら高等な術策やらが必要なわけでもなく、湧き出るアブラを売っていればいい。国民は、税金なし、医療費、電気代、電話代すべて無料、教育費も一切無料といった国からのサービスを享受し、体を労する仕事は外国人にやらせている。地下から湧き出るアブラは、無尽蔵のカネの湧出を意味し、それでもって、気楽に暮らしていけばよいわけだ。戦後進歩派が法螺吹いた「地上の楽園」は北朝鮮にはなかったが、ここにはあるらしい――ただし、アブラが湧き出る限りは、との前提付きだろうが。

1995 年に父ハリーファの外遊中に無血クーデターを起こして 7 代目首長となったハマドは、オヤジのやり方がよほど気に入らなかったのか、はたまた開明的な君主なのか、それまで世界一退屈な都市と揶揄されていたドーハにオイルダラーでもって次々高層ビル、ホテル、遊興施設をこしらえはじめた。彼こそ、今日のドーハをドーハたらしめた人である。空港の名は彼から取られた。

なるほど金ピカのまちにふさわしい真新しい、機能的な空港である。チケット発券ルール上、乗り継ぎ最低時間がわずか 45 分しか要らないことが、そのあたりを物語っている。空港の過密から来る便の遅延も少ないのだろう。今回もほんの 1 時間 10 分でベルリン行きに接続である。長距離を飛ぶ国際線では考えられない。

壁一面のガラス窓から外を臨めば、周囲に見えるのは唯ただ砂の沙漠だけ。ラマダン月だから、日中は飲食が制限される云々と着陸前のアナウンスで言っていたけれど、降り立ってみれば、何のことはない。モノで溢れかえっている。この物質的豊穣さは果たして永劫のものなのだろうか。産油国が等し並みに享受するこの豊かさは、20 世紀以降、石油に依存することで野放図に拡大したモダニズムがもたらしたことは間違いない。周囲環境におよそ調和しない――どころかこれ見よがしに拒否の姿勢を見せる「非環境建築」を人類の技術的到達点とみる楽観は、おそらく過去のものになるだろう。そう考えると、なんだか沙漠の中の蜃気楼をみるような気がしてくる。この空港のことなのか、この国のことなのか、あるいは丸ごと人類を意味するのかは、判然としない。

（July.1.2016）

異境の朝

4 時過ぎには東の空がもう白々してくる。研究所に隣接したコテージの吹き抜けのリビングは Schöhsee 湖（語尾の see は湖を意味する）に東面して大きなガラス窓がきってある。軽雨が屋根をたたく音に混じって、野鳥のさえずりがする。今日は、一日にわか雨らしい。

無上の贅沢とはこういう時間をいうのだろう。唯ゆっくりと時が過ぎていく。仕事に追われて寧日なき日常に苛まれていたわけでは決してなく、普通の勤めに比べればよほど暇なクチだったろう。何かに不足を感じる生活だったわけでもない。けれど違うのだ。豊かさそのものの意味が。

淹れ立てのコーヒーで霞のかかった頭が冴えてくる。

初期老化によると思われる年来の惚けを、この際、錆落としししたいと思う。日本にいては、到底、望み得ない哲学の時間を持ちたいと思う。

この時間さえあれば、美食、美服、美女その他一切の必要を感じない。まるで風景が異なるが、西行が高野山や吉野で営んだ草庵からの眺めとは、おおよそこんな感じであったろう。

昨日、汽車を乗り継いで Berlin から移動した。最後の乗り換えは Lübeck だった。Kiel に至るローカル線。Lübeck も Kiel も、ここらでは大都会だが、それとて人口 20 万一寸に過ぎない。気動車が走る単線の鉄路は、針葉樹の原野を貫いてゆく。随分と走って、思い出したように停まると、そこがあたりの主邑になっている。が、大した人家の数ではない。しばらくすると、左右に美しい湖景が拓けてくる。小半時走って Plön に着いた。湖畔は夏の間リゾート客で賑わうそうで、駅から研究所までとぼとぼ歩いていると、ボート競漕か何かのイベントだろうか、中学生か高校生ぐらいの連中が集まっている。――いい匂いがしてくる。砂浜に移動式の燻製機が据えられている。ここいら北海に面した一帯ではニシンの燻製がよく食される。あれをはじめて喰ったのは 25 の歳、オランダは Ijsselmeer 湖に面する Enkhuizen でだったか。初めての海外暮らしの心細さからだろう、今思うと似て非なるモノだけれど、あじの干物の味を思い出したことを覚えている。それからすると、私も随分と摺れたものだ。そうは言っても、これまで住んできた Leeuwarden、Denver、Canberra や Eindhoven とは、ここ Plön は圧倒的に異なる。何しろ人口 8700 人の小邑である。

こんなところにマックス･プランク研究所／進化生物学研究所はあるのだ。立地が浮き世離れしている。古代ギリシアのアテナイ北西部にあったというアカデミアとは斯くの如き学林であったろう。研究所は湖に面して横長低層のこじんまりした建物だが、大きな開口部で明るくデザインされた造りはあくまで贅沢である。数理社会生物学には、実験設備がいるわけではなく、紙と鉛筆さえあれば事足りるのだ。思索には、街の喧騒も最新の実験装置も要らない。ただ贅沢な時間さえあればよいと云うことか。

わたしたち日本および日本人は随分と豊かになった。単に Materialism の観点からだけで

なく、社会基盤としての「富み」がいかなるものか、衣食足りて礼節を知るようになって漸く解ってきたのではなかろうか。張りぼてや偽物コピーで仮構された豊かさに酔う連中や表層だけ developed country を繕う偽造国家をすぐ隣に見るから余計にそう感じるのかもしれないが、私が若かった頃を思うと日本は格段の成熟を遂げたように思う。けれど、今いるこの真の豊かさを知るとき、彼我の違い――西欧の富の分厚さと我が日本の貧しさに思いを致さざるを得ない。やはり彼らだけが一等船室の乗客なのだ。

北緯 54 度だから、夜は 9 時過ぎまで明るい――らしい。と言うのは、滞在三日目になるが、そんな時間まで起きていたためしがないから、本当か否か実見してないのだ。

（July.2.2016）

マックス･プランク研究所

ドイツ各地に所在するマックス･プランク研究所だが、ここはその一つの進化生物学研究所。地下一階地上三層の建屋は日本で云うと凝った造りの IT 企業研究所といったところか。客員教授室が空くまでこの一週間はポスドクと同居してくれと言われたが、彼氏は今週国際会議で出張だから、実質、15 畳ほどの個室を占有している。小規模な研究所だけれど、秘書や技術職員などのサポートスタッフを入れると 70、80 名くらいが働いている。驚くべきことに Professor のタイトルがつく専任は Arne を入れてたった 5 人しかいない。この 5 人から所長を選ぶのだから、たまったもんじゃない、弱小球団の投手ローテーションのようなモンで、任期終わったと思ったらまたすぐだもんとぼやいている。Arne Traulsen 教授は 1975 年生まれと言うから、わたしと十違う。若いから辛かろうが、なに、俺の今所属している専攻なんぞ、ついこの間まで 4 人の教授で主任ローテだったから酷いモンだ――が、今回、客員で出掛けるのに本来わたしの登板だったのを免除して貰ったから、先輩には感謝している――その割にはデカいと思われているだろう日頃の態度を改めねばならぬ。

5 名以外の研究者の大半は 2 から 3 年、最長で 5 年任期のポスドクだ。彼らは 1 スパンの居室を 2 名 1 室で分居。他にドクターコースの短期長期の指導委託によりやって来ている学生が若干生息。要するにみな若い人ばかりで、私は高齢者である。この体制で Nature、Proceeding of Royal Society B、PNAS（Proceedings of the National Academy of Sciences）を連発しているのだから、ものすごい生産性と言わねばならない。金曜日に世話をやいてくれた Michael Sieber 博士もそうだが、みなポスドク奉公が 2 期目くらいの（ただしここでは 1 期目）――トータル citation は 100 から 200 くらい、多くても 500 は出ない若くて活きのいい数理生物学者である。僕なんかよりよっぽど算数できるんだろうなぁ――算数の出来不出来が頭の善し悪しに完全に一致するとの根深い偏見を持つ私は左見右見（とみこうみ）。要するに教育機関ではなしに、研究機関なのである。――○×くん、△□ちゃん、学校出てきてるかなぁ、勉強しているかなぁ――ピンポンパンの時間時ですよ――とまで言っているわけではないが、あ～あ、本当の大学研究所ってのは、こう云う知的環境を指すんでしょうね･･･唯々嘆息。わが学生諸君、そして日本の若人よ、是非こういったところでのポスドク修業に出かけて行ってくれい――世界は広く、その懐は深い――アメリカとは違った意味でね。

グループの週ゼミに出た。10 名くらいが集まっている。誰かが持ち回りで話題提供する。今日は半年滞在予定でちょうど三ヶ月たったところと云うイランからの PhD 学生が当番だった。そのうち俺にも喋らせてくれい――若衆に混じって大人げないとみられるか、とにかく一発カマしたがっているヘンなシナ人と見られるかが関の山だから、言うのを堪えたが、しまいに時世は巡ってくるでしょう。彼女の発表内容は、進化プロセスにおける固着確率とその 1 次モーメントすなわち固着平均時間のトポロジー依存性についてで、Moran 過程を

使ったオーソドックスな理論アプローチとシミュレーションの両刀使い。本人は気づいてないようだったが、よくよく結果眺めると、平均固着時間と社会サイズとの間にスケールフリー性が現れてくる——トポロジーの違いはパワー則の勾配だけに集約されてしまう——そりゃ美しいハナシじゃないか。まぁ飛び上がるほどではないかもしれないけど、学生にしたら、なかなかのモンだろう——バックグラウンドは数理生物でなく、統計物理学との由——いやはや、実にたくましい。グループ主宰者の Arne が 6 割くらい質問して、初回につき遠慮した私が 3 割——皆あまり発言しないのだ。なんだか自分んちの英語ゼミのようだった——おいおい、皆もっと議論しようじゃないの。内容はそこそこだと見たが、あまりおもしろくなかったのだろうか——まさか、うちの学生のように舌がもつれて言いたい事が話せないってことはあるまいに。それとも、俺みたいに阿呆な事ばかり言ってると、馬鹿にされるとでも思ってるのか？ゼミのあとにニュージーランドから来ていると云うポスドクの女性が部屋まで挨拶に来てくれた——ああ、そうか･･･ここはアメリカじゃなくて、ドイツなんですね——軽薄にピーチクぱーちく喋るのをどちらかというと軽蔑する、よく云うと「奥ゆかしさ」を尊しとする文化でした——反省します。でも、五十過ぎたおっさんの性格なんて直りません。

（July.5.2016）

最初の週末に――海外における日本および日本人考

夏の日は長い。ここらは、せいぜい最高気温が 20℃前後だから、そちらの蒸し暑さはまるで人ごとである。こちらの人にしたら、冬の陰鬱さが身に浸みているが故に、つかの間の夏を精一杯楽しむのだろう。わたしは行かなかったが、昨日金曜は研究所の遠足だった――周囲の湖をぬって 10 キロほど歩いたところまで――人によっては自転車で――出掛けて行って屋外バーベキューと湖水浴（少々寒くはないだろうか）だと云う。前稿では、学生は居らずポスドクばかりのプロ集団だと持ち上げたばかりなのに、奇態なことだと思ってはいけない。学童遠足の意にあらずして、こちらの人が如何に生活を楽しむかの一風景と見るべきなのである。ほとんど人のいない金曜日の研究所は実に森閑としていて、深山幽谷の学堂そのものであった。移ってきた個室は南東向きの湖側で、木々が茂って湖面は見えないが、窓を開けると鳥たちのさえずりが聴こえる。にわか雨の予報だが、午前の陽光がまぶしい。
――嗚呼、何という落差だろう。
日本が物質的に何ほどか豊かになったと言われても、この殆ど垂直的な落差は決してうまるものではない――永遠に。
無論、能力と野心があれば、この豊かさを享受することは出来るのかも知れない。が、そのためには日本および日本人であることを放棄して、こちら側のフルメンバーとなる覚悟、そしてそれを可能ならしめる才能および幸運がなければならない。自分の歳では日本および日本人であることを今更止めるなど出来ぬ相談だし、健康なナショナリストとしては（人よんで、右下教授――右翼反動で下ネタ好きのマッド･サイエンティスト）そもそもその気も無い。若かったらどうだろう？海外居住するたびに同じ自問を繰り返す。自らの日本および日本人たるを意識する以前なら敢然挑んだかも知れない。けれど、そうなると、それはもう相当に若い頃、遅くとも中学生くらいでないと駄目だから、結句、ありもしないことを夢想しての繰り言になる。せいぜい数ヶ月から数年の許された時間内で、（それも客員身分と云う日本の保護の元）こちらに生活する機会を与えられ、そのたびに彼我の豊かさの違いを思い知らされ、嘆息させられるだけでも、ありがたいと思わねばならないのだろう。外からの一時体験者ないしは観察者として垣間見ることは許されても、真諦（しんてい）の意味で実生活者になることは、日本人には限りなく困難であろうから。

思えば、何という非対称性だろうかと嘆くのである。

かれら西欧世界が三、四百年からの時間をかけて作ってきた近代――モダニズムにわたしたちは参加しているに過ぎない。ルール設定者に異議申し立てを為そうとしても、最初

に秩序を作り上げた彼らの頷じうるところにならないのは当然である——First come, first served——早い者勝ちはゲームの習い。文句あれば、最後は盤面をひっくり返す——暴力に訴えるしかない。かつてコテンパンにやられた吾等はその愚を知っている。現下、シナが公然、挑戦の意図を隠さなくなっているように見えるが、覆るとは思えない。モダニズムの秩序がひっくり返るときは、丸ごと人類が倒れるときだろう。

アメリカ人は STAR WARS に出てくる異星人が流暢に英語喋っていたって奇異に感じないのだから、彼らがろくすっぽ言葉喋れない日本人にエイリアン以上の不気味さを感じたとて致し方あるまい。これは国籍、人種——もっと言うと膚の色をいっているのではない。非 WASP どころか黒人の大統領がいるくらいだから、国籍や人種がどうのと云う問題ではない。英語と欧米的常識とを精神基盤として——いわば基本 OS として、共有しているか否かの問題である。彼らが、国境だの、民族やら地域、はては文化の違いを、自分たちは軽々跳躍して流動している等と自慢げに主張したって、どってことない事業だろうと思ってしまう。それを言うなら、火星に行って、ほら地球と同じように呼吸も出来、生活も出来ますよと言って見ろ——とまでの悪態はつかない。が、私たちの国境や文化基盤の違いに関する概念が、そもそも彼らのそれと同じでないのは明らかだ。アメリカ人がここマックス･プランクにやって来、カナダ人ポスドクが今度はスペインに移動し、ニュージーランドから来ていたマリオ族出身の彼は秋からブリストル（イングランド）に動くだの言ったって別に驚きはしない。この彼我の違いの因を、昨今、社会やメディアも、文科省の役人も、そして世に迎合しようとする我が仲間たちまでもが、声高に言うところ日本のアカデミズムの閉鎖性だけに帰すべきではないと思う。それも小さくないことは認めるけれど、もっと根源的な何か——西欧圏に非ざれども、彼らに混じってやってきたし、これからもやってゆかざるを得ない日本および日本人の特殊性、いやもっと云うと、私たちだけに諒解される一抹のもの哀しさをともなう事々強い制約に端を発するものだと思うのだ。わたしたちは、本当に日本の大学や研究教育環境を彼らの如く変えられる、そして変えるべきだと思っているのだろうか——同僚たちにはその手しか吾等に生き残りの方途なしと説いているけれど･･･。通有性という点では、吾等と同じくほとんどゼロなのに、己に過剰すぎるほどの自信を持ち自らを中華と云ってはばからぬシナ人の陽気な楽天性が羨ましい。

軽薄な意味でのグローバル化とは、日本および日本人であることをよして、彼ら側のルールに身ぐるみ合わせることを意味する。ローマ帝国、シナ歴代王朝を引くまでもなく、周縁蛮族にとっての文明論的普遍性とは、そもそもそういうことだ。かつて植民地だった国々が、あるいは一部のシナ朝鮮の人々が、息せき切ってそうしているのに何ら疑義を抱かないでいるのは、在来の自分たちの基盤 OS に依存するより、その方が遙かにてっとり早いからで、当然その過程で失うものも大きい筈なのだが、物質的な豊かさだけに囚われていると見えなくなってしまう。連中のように、一途に QS ランキングを追いかけることが、日本の大学を底上げすることになるとの謂いは、あまりに短絡的に思われる。

じゃあ、どうすればいいのだ？

う〜ん、わからない･･･。だが、しかし、これだけは言える･･･我が学生よ、若人よ。英語を勉強する前に、日本の古典に接する機会をすべからく持ち給え。そして、こうも言っておこう。貴君貴嬢らが、聖書とマクドナルドを右手左手（めでゆんで）に、いくら巧みで流暢な英語でもって、どれだけ両手を広げて大げさなゼスチャーでもって、もの言うたところで、決してアメリカ人やドイツ人に化けることはできない。それよりも、まず、日本および日本人であることを誇り得る「何か」を獲得せねばならない。

日本および日本人にとっての国際化とは何を意味するのだろう。あまり根つめて考えたって、まともなこたえに逢着できるとも思えない。こんな荷厄介なこと考えなくて済む、こちらのインテリが羨ましい。

ちなみに筆者いう――ここ Plön には、マクドナルドやケンタッキーその他およそ類する店屋のたぐいは一軒もない。

（July.9.2016）

Lübeck――ハンザ同盟と北ドイツ

　こちらに来て二度目の土曜日である。北海沿いの北ドイツの七月の天候といえば、大抵、日に一度はにわか雨――シャワーがあるが、今日は朝から気持ちのいい晴れ間が広がった。予報によると雨はなさそうだ。
　Lübeck――リューベックまで出掛ける。「ハンザの女王」といわれた美しいまちで、世界遺産に登録されている。例の気動車が走るローカル線を 40 分ばかり東に戻ると、この古都に辿り着く。人口 20 万人の小さなまちにすぎぬ。だが、Plön から来ると、俄然、大都会に見える。

　中世はじめの欧州にあって――フランスの東方、イタリアおよびアルプスの北方、かつスラブ人の居住区の西方を大雑把に指したこのあたり――おおむね現在のドイツとその周辺に相当するわけだが――はまったくの後進地域だった。ローマの植民都市が沿革のケルン（ラテン語 Corele「耕す」が転じて「耕して住み着く」から「入植地」の意になった）はこのあたりでは最大の都会だったが、それでも西暦 1000 年時点でその規模 10 万人程度だったろうと推定されている。この時期、現在のドイツの領域には人口 1 万人以上のまちがたった 15 しかなかったと云うから、おおよそが察せられよう。
　西ローマ帝国が 5 世紀に滅んで、諸部族に別れていたフランク族がローマなき後のガリア全域を版図とする国を建てる。メロビング朝フランク王国である。が、統治安定を欠き、ピピン（シピン（大洋ホエールズ）じゃなくピピン――世界史で出てきたでしょう？）がクーデターにより、カロリング朝をうちたてる。751 年のことである。彼の息、カール大帝の治世でフランク王国は最盛期を迎え、カール大帝は「ヨーロッパの父」と現在も崇められている。ここで云うヨーロッパとは、ローマ帝国の版図が地中海を中心にしていた古代から、重心を北方へシフトした、現代に至る欧州の、もっと直裁に言うと西欧を中心とした欧州の直接の起源という意味でのヨーロッパである。が、彼の死後、王国は分裂してしまう（843 年）。委細は端折るが、二度の分裂を経て、カール大帝の社稷を継承することをローマ教皇に認めさせ、神聖ローマ帝国皇帝に戴冠したのは、意外にも――小領主乱立する――東フランクをまとめたザクセン公ハインリッヒ 1 世の長子であったオットー1 世だった。916 年のことである。ローマ時代のインペリウム――帝国が復活したのだが、それは名ばかりで、実際は諸侯の連合体といった方が正確である。この統治形態が、のちのち絶対王政を確立して強力な領域国家へと成長していく国々――イングランドやフランス、あるいはスイペインなど――からドイツが大きく後れを取る因となる。何しろ、主任教授や学科長みたいにローテや選挙でもって、皇帝を決めていたのだから･･･。「ドイツ」と言ったが、領域国家としての統一ドイツが出来るのは、他の領域国家からすると遙かに時代が下った後世のことになる――ビスマルクにより、ホーエンツォレルン朝

プロイセン王国の国王ヴィルヘルム 1 世をドイツ帝国の皇帝として戴くことを決め、ドイツ人の最初の統一国家を成立させたのは 19 世紀も後半の 1871 年のこと——明治 4 年、廃藩置県のあった年である。実際、この時期の中世ドイツは、中小領主や周辺の大領主が皇帝位を巡って争い、13 世紀半ばの 20 年間（1254-73 年）には皇帝が決められない異常事態が起きる。世界史の教科書を仄かにご記憶だろう——そう、大空位時代である。中世の欧州、とくにこのあたりの辺境部になると、この時期の歴史は実に混沌としている。その点、島国で否応なく「くに」の界域を常に意識せざるをえない中世・日本の方が——当時の政権運営者が今日的国家観を持っていたか否かは措くとして——遙かにまとまりがあるように見える。大空位時代のさなか 1268 年といえば、文永 5 年にあたり、この年、北条時頼が執権の座にあって蒙古襲来の予兆に備えるべく全西日本の御家人に令を発している。ついでに言うと、イングランドでは 1265 年に議会が作られている——無論、貴族たちの王政へのガス抜き装置的な機関に過ぎず今日の議会とは権能はまるで異なるのだが、その歴史的早熟さに驚かざるを得ない。

小領主がモザイク状に支配するのと併せて、自治都市が多く存在するのも中世ドイツの特徴の一つであった。当時、大きな力をつけていたハプスブルグ家などの大諸侯に対抗するために、13 世紀には多くの都市連合が形成される。ハンザの濫觴（らんしょう）もそこにある。1241 年にリューベックとハンブルグが同盟する。これがハンザ同盟の始まりとされている。ハンザとはゲルマン語で群を意味するから、英語で言えばコンボイ（その昔、そんな映画がありました——アメリカ版トラック野郎）と云ったところか。

リューベックは、1143 年にホルシュタイン伯アドルフ 2 世がトラヴェ河の中州に開いた都市で、店舗を持たずに商いをする遍歴商人と呼ばれる連中が次第に多く集うようになる。と云うのは、リューベックの南に位置するリューネベルグの塩に交易品として高い商品価値があったからだ。リューネベルグの製塩は地下の岩塩層からわき出る高濃度の塩水を鉛製のフライパン（大丈夫か！）で蒸発させて作った。生産した塩をリューベックから積み出し、コッゲ船とよばれる遠洋航海に耐える当時としては大型の一本マストの木造船でもって、北欧、ロシアへと輸出する。バルト海ではニシンが多く獲れる。ニシンの塩漬けは保存の利く食料品として、欧州中で需要があった。リューネベルグの塩を使って、ドイツ、北欧、オランダ、バルト各地に散在するハンザ諸都市で加工された樽詰めニシンは年間数十万トンに達し、欧州各地に輸出された。毎年、夏から秋にかけてのニシン漁期になると北ドイツの各ハンザ都市から北欧に向けてニシン買い付けに出掛けるコッゲ船のコンボイはさぞや壮観であったろう。

ハンザ商人たちの活動域は、北海、バルト海を中心としたが、彼らは欧州内陸部や地中海地域までも長躯足を伸ばした。イングランド王は、ハンザ商人たちの経済上の貢献を嘉し、彼らにロンドン市民と同じ身分を与えたと云う。無論、彼らが商うのは、塩漬けニシンにとどまらない。ブリュッヘ（ブリュッセル）から積み出されるフランドル織物、ドイツ騎士団領（ドイツ人が伝統的に云う「東方」つまり今のポーランドあたりにあった）か

らは木材や琥珀、ポーランド王国からは穀物、ロシア方面からは黒貂、熊、リスなどの毛皮など多様な交易品がハンザ商人によって欧州中を行き来した。

この時期、ハンザ商人が依った北海、バルト海中心のネットワークとともに、もう一方の交易ネットワークが地中海沿岸域にも成立している。こちらでは、ベネチアを中心にするイタリア商人たちが活躍した。世相は十字軍の時代ではあったが、欧州における香辛料など東方産品への需要は一貫していたから、交易自体はイスラム商人たちとの間に盛んに行われていた。13 世紀の欧州政治は、第 4 回の十字軍により明ける。ベネチアは、1204 年、十字軍の本来趣旨とはおよそかけ離れた意図をもって、同じキリスト教国——カトリックとオーソドックスの違いはあるが——の東ローマ帝国の都コンスタンティノーブルを攻め、これを陥落させる——何のための十字軍か判らない。やや下って 15 世紀の半ばに東ローマ帝国はオスマンの圧力に耐えかね遂に滅び去るが、この前後のどさくさでベネチアが得た利権は莫大なものがある。東地中海から黒海のあたりはさながらイタリア商人の内海と化す。かくて地中海貿易は全盛期を迎える。

この二大広域交易圏を支えたハンザとベネチア商人だが、同じ欧州内であっても商習慣の大きな違いが見て取れておもしろい。よく知られるように、リスクヘッジのための近代的保険の仕組みや為替決済を前提とした銀行のシステムはベネチアが起源である（エネルギー科学科出身の者は覚えているだろうか——「エネルギー環境論」で保険数理学の話をしたろう？）。一方、ハンザ商人たちは、現金、現物による即物決済によった。ゆえに為替決済の仕組みは発達しなかったが、破船のリスクをヘッジするために保険ではなく、船舶共有組合が発達した。多くの商人が一つの船に投資することでリスク分散をはかる仕組みである。株式会社——カンパニーの起源である。

が、いずれの交易圏も、大航海時代以降、アジア、アフリカ、さらには北米、中南米からの一次産品が、直接、欧州へ持ち込まれるようになると、時代的役割を終え、衰えてゆく。16 世紀になると、もはや欧州外地域とのグローバルネットワークの時代になる。ハンザの栄華は過去のものとなる。

「都市の空気は自由にする」（Stadtluft macht frei——中世における法諺（ほうげん——Rechtssprichwoerter（独）、legal maxims（英））の一つで、このあたりでさかんに流通していたことば）とのフレーズを世界史の授業で聴いたことがあるだろう。現在のドイツ連邦の行政制度では、中世自由都市に起源を持つハンブルグやブレーメン、それと首都ベルリンは単独で州と同等の行政単位——都市州を構成している——米国のワシントン DC を想像すればいい。リューベックもそうだった中世の自由都市が、この国にとっていかに歴史的に大きな意味があるかがわかる。現在のリューベックは、ハンブルグやブレーメンのように、現代都市として、政治や産業のハブ機能を果たしているというわけではない。ハンザの繁栄が過去のものとなって、小さな地方都市として命脈を保ってきた——故に往時の面影がそのまま残されている。

12 世紀にホルシュタイン伯アドルフ 2 世が、トラヴェ河の本流とそれを取り回した運河を作ることで、このまちを拓いたことは既に述べた。リューベックは、泉州堺のような——秀吉によって埋められてしまう以前の——環濠都市として造られたわけだ。諸侯が虎視眈々とねらう富の集積地である都市の独立を防衛するには、塀か壕を巡らすかしかない。このまちの基本構造は、当時のままである。15 世紀に建てられた市庁舎を中心に、観光客たちが逍遙するダウンタウンは、この南北の長径 1 キロ半、東西が 750 メートルの丁度ナツメの実のような楕円状の中の島にきれいに収まっている。

このナツメ状の中の島に、西方からアプローチすると——現在の中央駅から 5 分ほど歩いてやってくると——ホルステン門に突き当たる。ここが、当時も今も、まちの正面入り口になる。15 世紀建造の重厚な煉瓦造のこの門は、あまりの重量で周囲の地面にめり込んでいる。あたりには河に面してリューネベルグから運んできたかつての塩の収蔵庫跡が今もその佇まいをとどめている。

楼門の上にはラテン語で CONCORDIA DOMI FORIS PAX と書かれている——この内側（にある都市）には協調を、外側には平和を。

遙々、北ドイツの野をやってきた商隊は、遠くからこの楼門を認め、この金文字を見上げながら、安堵の心地でこの自由都市へと這入（はい）っていったのか。あるいは、バルト海からトラヴェ河を遡上してやってきたバイキング末裔の荒くれ男たちは、陸土を踏んだ刹那、燦然と輝くこの金文字に邂逅し、身を打ち震わせて、その中世的自由精神にうたれたか。蓋し、彼らにとっての中世都市は、アラビア商人における沙漠のオアシスのようなものだったろう。

（July.10.2016）

ドイツで行雲流水の生活は可能か

日本では2時半起床、3時にオフィスに出る生活――午前3時である――わが研究室の学生じゃあるまいし午後3時のわけがないでしょう――尤ももうこうなると一寸早起きの変わった人では収まらず、家人どもには久しく狂人扱いされている。他で十二分に狂っているのだから、寝て起きる時間くらいせめて常人並みに出来ないかとの家人の嘆きもわからなくはない。病膏肓に入り、ハナシは既によい子の早寝早起きでは済まされないことも認めよう。以前は5時だったのが、いつしか4時になり、それが3時になってしまった。年齢とともに酷くなる。一日の決めた行を果たさないと気が済まず、それをなるべく早くやってしまおう、早くお勤めを終えれば残り時間はおまけみたいなものに思えて楽なのだ、との強迫観念に押され押されての朝3時である。そうすれば、いろいろなことが出来る――あれこれの余得あり。が、万事よいことづくめかと言えば左にあらず。これ、学生には嫌みに聞こえるようですが、本当にそうなんです･･･。夕方からダラダラ会議なんかされたらイライラは募って精神衛生上は却って逆効果が大きい。世間並みのつきあいも出来ない――もっともその気もないのだけれど。夜8時に床につかないと翌日の予定が狂う。昼飯を喰うと俄に眠くなる――上げたらきりない。一時まじめに――勿論、どこまで本気かは措くとして――雲水の修行生活に入ろうと思った。人には西行のように子供を縁側から突き落として出家する（古今のベストセラー『西行物語』の有名エピソードより･･･勿論、史実ではないでしょう）のだと言っていた。もっとも今なら、馬鹿なまねは大概にせよと逆に私の方が子供に突き落とされるだろう･･･。甲州は見延山だったか、人里離れた山懐――なにしろ電話も通じてないような辺鄙な所――に無宗派の座禅道場があって、一週間単位で入山を受け入れるという。いきなりの出家遁走は煩悩だらけの私にはチトむずかしいので、夏休みにでもと思いながら、そのうち熱が冷めた。座禅はいいとして、こちらが決めた勤行をさせてくれるような手前勝手な修行など認められないことに気がついたからだ。

夏時間の当地と日本とは時差7時間。こちらが遅くれているから、以前通りの生活時間でちょうど日本と同期する。嗤ってはいけない。恥ずかしながら我が研究室では、朝10時にノコノコやって来ても彼彼女らは大威張りでearly birdヅラしている――夜も早くねぐらに帰る。鳥目で夜は苦手なのか、夜は夜で別の部があるのか。イヤイヤ･･･憎まれ口は大概にしておきましょう――唯でさえ、口うるさいと思われているのが、いないときくらい悪態つくのはよさないと彼らにも立つ瀬がありません。

我が勝手勤行の一つに自転車がある。頭もそうだが、体を労することを厭うていては碌な事は無いとの信念に基づく。山上の茅屋から大学との間を往復すると16キロなのだが、これを1回と数えて、渡独直前で積み上げた記録が実に2748回（鉄人･衣笠の連続試合出場記録じゃあるまいに――そんなこと自慢してどうするとの半畳が聞こえそうで

す)。これにはカラクリがあって、用事も無いのに土日に学校に出、その足で博多駅前祇園の菩提寺によって墓参をすると 3 回に数えるだの、太宰府の向こうを大回りして帰ると 2 回だのと記録水増しをする。休日には、ダンプカーが横をビュンビュンかすめて走る国道 3 号線を鳥栖まで往復するだの、志賀島を一周してくるだの、兎に角、そこらここらを見境なく走り回って、ノルマ達成および記録積み上げに狂奔する。こうなると 4 時が 3 時になるのと同じ理屈で、何のための自転車なのかが忘れ去られ、決めたことを必ずせねばならぬ、記録は積み上げねばならぬ、との強迫観念が先に来る。やはり、私は狂っているのだろう。

当地ではまだ自転車を手に入れてない。長の夏休みで記録足踏みも気になるし、体がなまるのも宜しからず。4 年前の夏、Einthoven にいたときには、週末だけレンタルサイクルして、隣国ベルギーまで遠出していた——と、言ってどってことない。ほんの片道 20 キロで、国境なんて何もないのだから。

この稿で何度も述べたが、ここいらあたりはドイツでも最も自然の残る風光明媚なところで、湖水あり、原野ありでサイクリングにはもってこいの場所なのに･･･。

が、もっといいことがあったのだ。

日曜の朝、一寸、遠出の散歩に出掛けた。ドイツ語を第二外国語選択した御仁はご記憶だろうが、教科書で紹介されるドイツの生活習慣といえば、洗濯は殆ど熱湯で煮るように行う——実際は 40℃から 80℃までの湯温を選べるようになっている、ハンカチで鼻をかむと云うのに並んで、スーパーや店屋の類いが日曜日は全て休業するというのがあったろう。これはドイツに限らず、周辺国はみなそうだ。オランダも然り。が、ここ Plön は例外で、日曜日も営業している。ただし、昼の 12 時から。これは、Michael が最初の日に教えてくれた。訊けば、観光客が多い夏の間は日曜も営業するのだという。12 時にゆらゆらまちに買い物に出掛けるのに、そうさなぁね～片道 1 時間くらいの散歩をしてみるかねと出掛けたのが朝 10 時前。コテージを出で、東行する道は左に右に次々と湖を見ながら、かるい上下を繰り返し、蜒々（えんえん）としている。キャンピングカーやボートを牽引した車にたまに行き交う羊腸小径をしばらく進んで、北に向かう側道へと折れる。こんどは原野と一面の玉蜀黍畑をみながら丘を越えてゆく。ちょっと小一時間のつもりが、出掛ける前に調べていた地図を思い出して、つい欲が出た。隣駅の Bad Malente Gremsmühlen まで歩いてやろうと思い始めたのだ。地図に依れば、14 キロくらいか。もっとも、これは湖水の間を縫っていく道を取るからで、Plön と Bad Malente Gremsmühlen とを繋ぐ鉄路は、最短距離とは云わぬがもっと短い。たった 14 キロ——日々往復 16 キロの托鉢行ならぬ自転車勤行で鍛えている足腰にしたら軽いもんだと甘く見た。と云うより、予定外の行動がよくなかった。ほんの買い物ついでだと思っていたから裸足に靴をつっかけて来てしまったのだ。2 時間余の長躯の末、ようやく Bad Malente Gremsmühlen 駅にたどり着いたときには、酷い靴ずれで抜き足差し足の態となってしまった。折良く Lübeck 発 Kiel 行きの例の鈍行ディーゼルカーがやって来、一駅 10 分で Plön に還りつくと丁度 12 時。いや～やけに

長い日曜午前になってしまいました。

　サイクリングもいいけれど、毎週日曜日にこの散歩とも言えぬ長躯跋渉（ばっしょう）——阿闍梨の千日回峰行もかくあらん——をする方が断然体にいいぞ。この歩きの 14 キロは、physical には自転車往復 16 キロの 2 セットに相当する——とくだんの水増し記録よろしく、手帳の今日の日付に 2749 回と 2750 回を嬉々として書き入れた。いや～非常に満足です。気分すこぶる宜しい——やはり私は狂っているのでしょうか？

（July.11.2016）

港まちキール

キール（Kiel）は Schleswig-Holstein 州の州都で、人口 24 万人の港町である。この稿に何度も出てきたが、Plön は Lübeck（リューベック）と Kiel（キール）を結ぶ単線気動車の走るローカル線の丁度中間にある。Plön からは汽車に揺られて 3、40 分でキールに着く。Lübeck よりはやや近い.

リューベック同様、歴史は古い。15 世紀からはデンマーク領になった——デンマーク王家であるオルデンブルク家が Schleswig-Holstein 公国の公位を継承したからだ。1866 年、プロシアとオーストリアとの間に起こった普墺戦争——俗に云う七週間戦争の結果、プロシア領となり、そのままドイツ領となった。この稿の初回に述べたが、このあたり——かつての Schleswig-Holstein 公国が、デンマークとの歴史的係争地だった所以である（どうしてデンマーク領だった所が、普墺戦争の結果、プロシア領になったかの事情は複雑なので端折る）。普墺戦争はドイツ陸軍参謀本部の実効が試され、オーストリアの大敗により実証された戦いとなった。指導したのはヘルムート･フォン･モルトケ（1800-91 年）である。戦争の本質的な意味としてはドイツ語を母語とするドイツ民族の内輪喧嘩といえなくはない。おくれてこの地域に起こった民族国家構築への胎動ともいえる——はやく団結しないと英仏に全てのヘゲモニーが握られてしまう･･･。民族の大同団結により統一国家を作ろうとの大ドイツ主義は理想ではあっても、領邦小国がモザイク状に分かれていた当時のドイツの現実では土台、それは無理なハナシだった。ハプスブルグ家のオーストリアが唱導するのは、さすがに欧州老舗大国だけあってよりおおきなハナシで——自ら多数のスラブ人、マジャール（ハンガリー）人を支配する状況がそうさせたのだが——ドイツ人が伝統的に云う「東方」を包含したもっと巨大な中欧帝国を作ろうというものだった。対して、新興国ではあったがビスマルク主導の下、地力をつけていたプロシア王国が主張したのは、参加できる国々により一刻も早く統一国家を作るべきだとするもの。このあたり、戦後の全面講和か単独講和かに似ている。プロシアの勝利により、オーストリアを抜きにした小ドイツ主義によるドイツ帝国へと歴史は展開していく。帝国成立は 1871 年のこと——ドイツ参謀本部の名を世界的に喧伝することになる普仏戦争のさなかのことであった。

港湾都市としてのキールの繁栄はハンザの頃からだが、統一後は海軍の拠点がここに置かれたこともあって、軍都としても、また造船のまちとしても一段と発展していく。鎮守府がおかれた呉や横須賀に性格が似ている。

統一後の帝国ドイツの仮想敵は地続きの大陸軍国フランスであり、大海洋帝国である英国だった。水上戦力では到底、英国に太刀打ちできない。海上の戦闘は、陸戦にはありえ得る——鵯越（ひよどりごえ）や桶狭間のような——奇策はなく物理的火力とそれを裏付ける技術が勝敗を決する——つまり、どれだけの大砲を集中運用して相手の艦隊を叩くこ

とができるかで決まる。大口径の戦艦をどれだけこしらえ、揃えられるかは国力そのものだから、後発国には勝ち目がない。が、奇手があったのだ。第一次大戦時に、ドイツが取った戦略は、アメリカで開発されたばかりの潜水艦（当時これをホランド型潜水艇といった）をもって通商破壊を行うとのものだった。Unterseeboot ——水面下のボート——U ボートの名は連合国側には戦慄とともに記憶される（U バーンは地下鉄のことだが、これは Untergrundbahn すなわち地下鉄道から来ている･･･ドイツ語は無闇と外国語から借入したりせず既存語を組み合わせて新語を構成する漢語のような便利さがある）。この無警告無制限潜水艦戦がアメリカの参戦を招くことになろうとは（ルシタニア号事件による——世界史の教科書に沈没する客船の写真がでてきたろう）皮肉なものだ。第二次大戦でも U ボートは、死傷 7 割以上という損害を出しながら、それなりに大きな戦果を上げる。キールは、U ボート製造の、そして海軍根拠地として機能する（余談だが、Kiel 郊外の Laboe の砂浜に保存された U ボートが博物館として公開されている）。英国はこれを破壊すべく渡洋爆撃をしかけた。するとドイツ側はそれに耐えるべく基地造船設備を丸ごと防空壕の中に収めた「U ボート･ブンカー」をこしらえる。より強力な爆弾、ならばより分厚いベトン壁のブンカーをと云った具合の競争になった。もう大戦末期のこの時期、ドイツには自国の制空権を維持する戦力はなかったのだが、爆撃されるにまかされていたわけでなく、技術的競合がまだ成立していたことは記憶さてよい——B-29 にほぼ一方的に蹂躙され丸焼けになってしまったのとはわけがちがう。しかし、両者がいたちごっこを繰り返す過程で、キールの 8 割は灰燼に帰してしまう。

そのせいで、現在のキールの多くは戦後の再建になったまちなみなのだ。

バルト海に繋がるキール運河は中央駅のすぐ裏手まできている。ここからノルウェーのオスロ、スウェーデンのヨーテボリ、リトアニアのクライスペダとを繋ぐフェリーがほぼ毎日就航している。スカンジナビア、バルト三国、ロシアへの旅客船や貨物船、バルト海クルージングの豪華客船の桟橋はすぐそこだ。港に隣接して市街中心地が拡がっていて、目抜き通りの Holstenstraße はこの国で最も長い商店街らしい。と云ってロンパリ紐育（ニューヨーク）や東京大阪の大繁華街とは比べものにならない。人によっては港町の風情がどこか横浜や神戸に似ているというけれど、どうだろうか。やはり比較にならない気がする。何しろ人口が 20 万ちょっとなのだから、ここらでは大都会でも、せいせい誇大に言っても小都会が関の山だろう。と云ってくさしているのではない。この程度の規模だからこそ、町も人もやかましくない——落ち着いた風情でいられる。

中央駅裏手の運河をわたる橋は跳ね上げ式になっている。近隣まちとを繋ぐ小さなフェリーが行き来するたびに、間の延びた警笛を上げて、せり上がってくる。

土曜の昼近く。そろそろ人出が増えてきた。

見上げると白いカモメが風に逆らって、翼をめいっぱい拡げて漂っている。港を渡ってくる風はもうこの時期でもはだ寒く、小一時間も佇んでいると身にしみる。北ドイツの夏は短い。

そろそろ Plön へ帰ろうか･･･。

周りを見ると、若者がやけに多く、みな個性的な、いやヘンな格好をしている。中央駅に戻るとそんなのがゾロゾロいる。どうやらコスプレの大会か何かが催されるようだ。この手のおかしな若者趣味はまるで理解できないけれど、すき者心理はここも日本も同じなのだろうか。呆れるなぁ――どうにも了見が知れない。そこで、くしゃみ一発。バルト海を渡ってきた冷たい風が･･･いやいや――そう云うおまえの格好もいい歳してヘンだろうが、との声が聴こえてきたからだ。

（July.17.2016）

森のドイツ

『ニーベルンゲンの歌』はゲルマン民族の一大叙事詩である。第一部は熊殺しの英雄ジークフリートの非業の死を、第二部は彼の妻クリームヒルトが夫亡き後に繰り広げていく復讐劇を描いている。執拗な復讐ドラマの数々をみると、いかに原始のゲルマン人が血の気の多い、ローマ人たちがおののきとともに評した如く野蛮で残虐な、だからこそ武勇の連中であったかが想像できる。哲学、文学そして歌劇をたのしんだローマ人だが高度な文化は戦闘技術の発達をも生んだから、蛮族との非対称な争いは、そう忌避するものでもなかったろう。が、文化が爛熟してきて尚武の気風が廃れれば、シナ人が北方騎馬民族の侵襲をいい加減にしてくれないかとうんざりした心理と通底するものが出てくるのも避けられない。そのローマ人をしても、半農半牧畜とはいえ、ときに森に盤踞して狩猟もよくしていた古ゲルマン人の野蛮性、非文明性は驚くばかりだった。ましてや採取民族もしくは純粋農耕民族のわたしたちには想像できない。いまアングロサクソンといわれている人々、スカンジナビアからアイスランドにいたる地域にいる人々は、古ゲルマン人から分派していった。よって、現在の英国人、オランダ人、アイスランド人、スウェーデン他北欧の連中はみなドイツ人ともと同根である。そのこともあって、この神話とも民族伝説とも歴史的叙事詩ともいえる『ニーベルンゲンの歌』は、北欧諸部族とも共有されている。

テキストとしての『ニーベルンゲンの歌』の成立は、意外にも 13 世紀初頭と非常に新しい。神話を織り混ぜた古いエピソードが口伝されるうちに変容したらしく、例えば、西ローマ帝国を間接的に滅亡へと追いやったフン族との接触と死闘という 5 世紀にあった史実が取り込まれている。例のアッティラ大王はエツェル（Etzel）とのゲルマン風の名で登場する――匈奴説もあるフン族の侵入は古欧州人には余程の恐怖をもって記憶されたのだとわかる。この『ニーベルンゲンの歌』が俄然注目されるようになるのは、よく知られるようにリヒャルト･ワーグナー（1813-83 年）の歌劇『ニーベルンゲンの指環』によるところが大きい。ゲーテが『ファウスト』に半生を費やしたように、ワーグナーもこの歌劇の最終幕に至るまで実に三十年の年月をかけている。

ところで、この原典の『ニーベルンゲンの歌』だが、1200 年頃に、現在のドイツ南東部からオーストリアに至るドナウ川周辺のどこかでつくられたらしいことまでは推定されているが、作者は中世騎士なのか耶蘇坊主なのかさえ不明で、謎につつまれている。噺の流れや構成からして、性格が『古事記』に似ていなくもない。が、それからすると遙かに時代は下っているし、13 世紀成立の民族的テキストの作者が確定されていないというのは、ほぼ同時期の『平家物語』がそうだといえばそうだが（琵琶法師の口伝により物語が形成されていき、後世、数多くの異本が作られたから誰が作者かは不定）、日本ではちょっと考えられないことだ。中世欧州の、それもこのあたりの辺境部が、いかに文化的な後進地帯であったかがうかがえる。

『ニーベルンゲンの歌』の全編に底流しているのは、決して復讐を忘れない猛々しい戦士の心理と果てしなく続く、深くも昏い森の風景である。ここより随分と南にあるシュバルツ・バルトとは周知のように「黒い森」を意味する。今のドイツから西はフランス、南はアルプスの北方に広がる一帯は、古くは黒い森が延々続くところだった。黒いとは樹木相そのものからきてもいるのだろうが、樹高が深く、中にいると上から陽光が漏れ落ちるわずかな場所以外は暗く、周囲ぐるりを見回すと、はてしなくそれがずっと続いている——そんな、かつてはアルプス以北からここらあたりまで至る所そうだったろう森の風景——スイスの国民的ヒーローのウイリアム・テルがそこから出てきそうな——から来ているのではないか。そう思うと至極腑に落ちる。欧州言語にあって、Berlin ベルリンや Bern ベルンの語頭の ber は熊 bear と起源は同じである。当時の森には熊も多かったろう。

ドイツ人にとって最高の娯楽とは都会の喧噪を離れて、この黒い森の中で過ごすことである。これは今も昔も変わらない。ハイキング、森林サイクリング、林中キャンプがドイツで最も人気のあるレジャーである。そして、北ドイツのこのあたりがもっとも良質の森が残る一帯であり、おまけに湖まである（ちなみに筆者言う——Arne はじめ周囲に訊くと、ここも人が少なくて、いいところだが北海に面するドイツ北西海岸部には自然が残るもっともっといい場所があると自慢する）。夏の間、この Plön 界隈が観光客で賑わう所以である。と言って、日本のように人で溢れかえっているというのとは、全く異なる。人はあくまで少ない。今が観光シーズンだなんて、まるで信じられない人の少なさである。まったくもって曖昧な謂いなのだが、同じ「人がいない」、「自然そのままの森林」と云ってもアメリカとここととではまるで性格が違うように思う。住んでみた記憶をたぐって言うと、北米大陸のそれらは、西部劇で出てくる砂漠が延々続くだの、ロッキー大山塊のような荒々しい自然だのを指すのであって、そこには容易に人は立ち入れない、だから手つかずで残っている、との含意が強い。見て触れるには自動車がないとハナシにならない。けれど、ここのそれは、確かに黒い森が延々続くのだが人の介在が一切ないわけではなく、いずれは森がつき野を見たら、その果てには自由都市の城壁が遠望できる——そんな感じの「人のいなさ」がするのだ。

この稿で述べたけれど、毎週日曜日には Bad Malente Gremsmühlen までハイキングする。片道サバ読みで 14 キロ。帰路は列車一駅で Plön に戻ってくる。路に不案内なこともあり、車の通る脇にある遊歩道を行くから、あるところは森がそこまで迫っている場所、あるところは起伏のある野をゆくと云った風景である。黒い森の路とは言いがたい。

3 度目のハイキングの昨日は得がたい経験をした——ただし、もう二度としたくない。

いつものように 2 時間歩いて、Bad Malente Gremsmühlen 駅に着いたまでは、よかった。ここで 12 時 5 分発の Kiel 行き鈍行をつかまえればよいと駅のベンチに腰を下ろすと、なんだか様子がおかしい。そう云えばやけに人が多い。みなハイキングの背嚢だの自転車だのを運んでいるから観光客だ。のんびりキオスクのアイスクリームなんぞを喰ってリラックスした雰囲気なので、最初は、今日はなんだか観光客が多いと思っただけだった。あれ

れ、12 時 5 分になっても汽車がこないぞ･･･時間に正確なドイツがどうしたと訝り始めた（ちなみにドイツの鉄道では時間遅延は常態）。ふと無人駅のホーム掲示をみると、blinking サインで何だかメッセージが出ている。ドイツは国の規模が大きいも事あって、ほとんどドイツ語だけが流通している。隣国のオランダとまるで事情が違う。駅の案内なら日本の方がよほど英語併記になっているのではないか。ドイツ語、まるで忘れちゃってんですよね～もう、さっぱりです。そこで周囲に聴くが、年寄りは英語出来ないし、偶々周りにいたのが年配ばかりで今イチ正確には分からない。どうやら事故があって不通になっているらしい。30 分ほど待って、相変わらずなので、さすがに向こうの島のホームにいる若い連中も、どうしたもんだかと鳩首相談し始めた。携帯電話するのもいる。さっきの片言のおばさんに訊くと、かれこれ 1 時間待っているという。それでも特段いらだった風でもないから、みなのんびりしたものだ。日本での私ならとっくにキレてる。はてと･･･どうするか。直線距離では Plön まで 10 キロくらいだろうが、線路脇に道なんかない。邑同士を繋ぐ路線バスはない――湖を縫っていく船はあるがこれは性格上ほとんど観光船だ。タクシーで帰るほど老いぼれてもいない。そうなると solution は一つしかない。――還りも歩るって行く。えっ往復、歩き？――然り。本当は、いま一つ選択肢はあって、それは、もう一寸その場で待って、復旧するのを待つというオプションなのだが、こちとらめっぽう気が短い。それに地図にはあるが、家から国道を来るとたどれなかった、湖畔沿いのハイカー用の遊歩道を見つけられるのではないかとも思った。Bad Malente Gremsmühlen 駅のすぐそこに湖畔遊歩道の一方の終点があるから、逆順をたどればいいわけだ。地図上では距離も 12 キロと少々と近道できそうだ。もう、こうなると居ても立ってもいられない。膝はかなりきているのに、バネにはじかれたようにベンチから立ち上がると、完爾として湖畔の遊歩道をあるき始めた――よせばいいのに･･･バカだね。

しばらく歩くと、昏く、深い、そして所々にもれた陽光が落葉の絨毯にスポットを落としている、くだんの「黒い森」の中になる。路は先へ先へと延々続く。――そうだ、これだ。これこそ、ここに住んでいるからには何をおいても知るべきドイツのアウトドアライフだろう？たまに行き会うハイカーとチャリライダーに笑顔でハローと言い合う。――が、それも 3、4 キロ歩くまでだった。脇を見ると樹間の向こうに湖面が拡がる。その水面（みなも）に反射して遙か対岸から列車の警笛が聞こえてきた。えっ、動いてるじゃないの～。といって引き返すには随分歩いて来てしまっている。あれから 30 分は経っているだろうか。こうなると physical にギリギリだったのが、堰を切ったように崩れだし、疲労の度がいや増しに高まってくる。確かに素晴らしい森の路ではあった。が、昏い森の中の分岐で、どっちを取るか思案しては、引き返しなんてのを繰り返しながら、漸く湖畔の森の路をぬけて家まで辿り着いたのは、午後 3 時すぎ。もう、クタクタです。短いはずの帰路の方が往路より余程時間がかかってしまった。いや～疲れ果てた。もう、ドロドロです――。30 キロは大袈裟にしろ、優に 25 キロは歩いたろうから。こうなると自転車勤行で鍛えているだのの妙な自信は消し飛んで、ひたすら己のなした軽挙を悔やむ。翌日の月

曜日、歩くたびの筋肉痛に、どうして、もう一寸あの場で待ってみる忍耐が持てなかったかと後悔しきりである。

（Jul.25.2016）

研究所、大学、アカデミック

Arne Traulsen 教授は 1975 年生まれで、わたしと十（とう）違う。聡明な紳士であり、丁寧で親切だ。こちらにきて暇があり余っているものだから、モデルいじりをしている。彼と議論の最中、今イチの計算結果は初期一様分布がマズくって、2 項分布逆比例でないと駄目なのかと思いついた。ふつう周囲にこう云った——微細に立ち入る——思いつきを説明するのはまま大変骨折りなのだが、ほんの刹那の説明で諒解する。相手は世界的理論家であるから数学的直感は当方足下にも及ばない。それにしても、頭脳明晰な人とのハナシは早い。

彼我の仕組みの違いは、日本と西欧圏との差異によるところも大きかろうが、大学と研究所との違いもある。マックス･プランク研究所は日本で云えば日本学術振興会（学振）のような組織（Max-Planck-Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaften；略して MPG）が運営する、事実上連邦立の研究組織で本部はミュンヘンにある。先端基礎科学を対象に大小様々な分野の研究所が国内に 70 以上ある。ここ進化生物学研究所には科学者、学生、スタッフ総計で 80 名くらいだが、テニュアー科学者（みな Professor のタイトルがつく）はたった 5 人しかいない。あとはみな若いポスドクである。このことは既に述べた。各地の研究所が、丸めて云うと九大の各部局のようなもので、丁度ここが規模からして総理工のような感じか。専任教授 5 人——うち一人は病欠中、もう一人は定年間近でローテを外さざる得ない中で所長の輪番が回ってくるのは、彼のような根っからの科学者にはつらいことなのだろう。そうは言っても、エフォート 60%くらいしか管理業務はないと聴けば、どってことなかろうと思う。いや、羨ましい。現在、4 つのグループがあり、Traulsen 教授は理論生物学グループのヘッド——専任教授はグループに一人しかいない。グループが日本の研究所で云えば部門、大学院で云えば専攻といったところだろう。配下に学生数名を入れて 20 名くらいのアカデミックスタッフがいる。出身国は、無論、ドイツが多いけれど、スペイン、オランダ、UK、クロアチア、ギリシャなど欧州各地、ニュージーランド、インド、コロンビア、イランと様々。研究所なので学位の発給権はない。よって、学生は近くの Lübeck 大学か Kiel 大学かに籍がある。しかし、彼らの supervisor は Traulsen 教授だから、実質、ここの専任教授は両大学の併任と考えるべきなのだろう。博士課程の学生も、研究所からの奨学金付きのプログラムに応募して、激烈な競争を勝ち抜いて採用された者だから、ポスドクと大差はない。進学予定の優秀者は修士でも入所が許される。このグループにも Lübeck 大学修士 2 年の女子学生が一人いる。

学生もいるが皆一応プロの科学者で、西欧圏の社会であることもあって、Traulsen 教授と若い衆たちとの関係は、互いに名前で呼び合う、10 時と 3 時のお茶の時間にはバカ話に花を咲かせる、フランクな雰囲気である。だが、垂直関係は明然隠然にあって、ここいらは日本も同様だが、ポスドク奉公はやはり大変だ。Arne も所長業務でかったるいだの何だ

の言っても、ウィーン、ハーバードと渡り歩いて 37 歳のときにここのテニュアーになれたことが一番大きかったと言っている。故郷はこのあたりの在で、出身は Kiel 大学である。健在のご両親もここから 30 キロばかり行ったところに住んでいる。二重の意味でここは彼にとって最適のポストだったのだろう。ドイツでは平均 42 から 45 歳でテニュアーになれる者はなる——もちろんポスト数は少なく競争は激しいからアカデミックとしてのキャリアを途中で諦めていく者も多い。この国では学位取得後 11 年以上の研究歴か、教育歴がないとテニュアーになれない（法人化前のことだが、日本の国立大学にも学部卒業後 16 年経過しないと、つまり満 39 歳以上にならないと文部教官教育職 5 級の給与表に上がれないというヘンな制度があった——教授には昇任できるが給与上は助教授のまま据え置きとの意味)。テニュアー獲得は、矮小化して日本の感覚で云えば国立大学の教授昇任と同じだろう。今いるポスドク連中がどっかのテニュアーに就いて転出していくことは最大の喜びの一つだと言う彼は、俄然、教育者の顔になる。大学と違って分野再設定は短い時間スパンで行うことになる。グループには専任教授一人で、その選抜は向こう 10 年 15 年の方向および期待成果を決めてしまうから、ボンクラを選んだら一大事である。ミュンヘン中央の戦略策定とそれに基づく厳格な人事審査プロセスの責任は弥（いや）増しに大きい。人を決めると、その人の裁量に任せて、ポスドク枠を運用してスタッフを集めさせ、研究を推進していく。専任教授のグループヘッドには、ポスドク枠が基礎数配分され、テニュアー教授であれば最低限のスタッフは揃えられる。が、多くの枠はマックス･プランク研究所すべての中で競争的に配分される。判断基準は、むろん研究アプトプットによる。Traulsen 教授のような世界レベルの科学者であれば、10 人以上が配分される。理研でもほぼ同様な機動的仕組みが取られているだろうが、教育でなく研究成果を上げる目的に照らすと、合理的な組織運営である。ポスドクは任期 2 年で、更新は可能だが、Traulsen 教授のグループでは、2 年の任期中に毎月 1 本以上の論文——つまり 2 年で 24 本くらいを書かないと次はないという——ましてやテニュアーにありつくことなど出来ない。これはプロシーディングスを含めてなのか、ジャーナルだけなのか、あまりにショッキングな数字だったので訊き返さなかった。それでも師匠筋のハーバード大 Nowak 教授のグループにはとてもかなわないと Arne は言う。上には上がある。理論研究と云う分野特殊性はあるだろうし、日本でも似たような場所があるのかもしれない（大学にはなさそうだが研究所ならあるのではないか——そう信じたいけれど、どうだろう？）——それにしても、なんと厳しい競争環境なのだろう——とても私なんぞ生きていけない。実際、彼のグループではポスドクで 2 期目延長となるのは例外だという。研究アプトプットに関してプレッシャーが掛かってもペースを変えない者も多く、そうなると当然次はないのだが、それでもよいと云う考え方の若者が増えた、と Arne はいうが、そもそも常人にはクリアが出来そうもないハードルのように思われる。それでもここでポスドク奉公したことは大きなキャリアになるので次のポストは難なく見つかる。斯様の人事勘考ステムが若い科学者たちにあまりに強いプレッシャーとなって社会問題化したこと、また優秀な人材確保の観点から、

テニュアートラックが導入されている――その制度自体には彼我の大差はない――と云うより日本がこっちのやり方をコピペしただけのことだ。

じゃあ、なべて大差ないかといえば、そんなことはない。違う――圧倒的にちがう。何がどう違うって、研究、日常、生活すべてにおいて天地の如く違う。海外に出るたび思うけれど、西欧圏のファンダメンタルズそして社会的な富の蓄積の差に、ただ嗟嘆するしかない。ちょうど季節柄、皆が三々五々に 2 週間程度の夏休みを取っているから、人がまばらだ。それで十分に研究所として成立しているというのは、どういうことなんだろうかと思う（毎月、論文出さねばならないとなるとオチオチ夏休みも獲れない気がするがそうでもない）。東京にいないだけまだマシだと思っているが、どうでもいいことも、よくないことも、あれこれに振り回され常に寧日なき有様だった日本の生活を思い返す。大学は教育任務が大きいから同列には論じられない向きもあるだろうが、そうは言っても「世界的研究拠点」云々を標榜する拠点大学なら、ましてや先端研究機関であるなら、いかに科学者に研究だけに集中できる環境を提供せねばならないのではないか。世界では、それが出来るか否かが組織の帰趨を決めている。それには厳しい競争的環境が必須である。そのことを眼前に見た気がした。

Traulsen 教授のお宅で今居るスタッフを呼んでガーデンパーティがあった。休暇中でない者十数人が集まったか。研究所から徒歩 10 分。家の前の庭は緩やかな斜面で Trammer 湖に繋がっている。千坪じゃきかないだろう。5 年前に買ったという。不動産屋の広告からして、何億もする邸宅ではない、普通の人でも十分購入できる家屋敷なのだろう。我が身の、我が日本の卑小さが哀しくなる――が、深く考えないことにする。今いるこの時間を精々たのしもうと思う。

（Jul. 29. 2016）

※この稿は九州大学 Green Asia のニュースレター原稿に加筆編集をくわえたものです。

ドイツへの片思い

わたしたちが持つドイツのイメージと云えば、勤勉さ、規律と清潔とを好む国民性、それから高い科学技術といったあたりがまず挙がるだろう。なべて負のイメージはなく、称揚すべき、あるいは類似性からの親近感情が強いのではないか。無論、ナチスが絶滅目的で 600 万人からのユダヤ人を虐殺した歴史はたれもが知っている。が、そのことと現在のドイツを短絡して論を立てるひとはまずいない。左派や支那朝鮮の連中が歴史認識で責め立てる際、常套的に引き合いに出す「見習うべき国」であり、脱原発、エコロジーに代表される先鋭的な環境指向も然りだが、程度強弱は人によって異なっていても、おおよそ「宜しきを得ない日本としてはことごと手本にすべき国」との理解がなされてきたのではないだろうか。

そうではない、と大言しようと云うのではない。

ただ、このナイーブな——と言ってよいだろう･･･島国ゆえ隣国との勁烈（けいれつ）な物理的接触という歴史経験に乏しい日本人はおよそお人好しでノーテンキである——ドイツへの思い込みは、全くの片思いであることを明徴にしたい。

明治政府が、近代化のモデルとして手本としたのは、薩長に肩入れした英国でもなく、幕府を支援してきたフランスでもなく、長い付き合いのオランダでもない。当時、殆ど欧州の新興国でしかなかったドイツだった。ペルリの砲艦外交で幕末騒乱が始まったとの意味で、アメリカとは腐れ縁があったが、ドイツとは別の意味で新興国に過ぎず、かつ南北戦争（1861-65 年）が終わって間もないアメリカには手本にされても応じる余裕などなかった（アメリカにとって最大の戦死者の出た戦争は第二次大戦でも第一次大戦でもなく、無論、ベトナム戦争でもイラク戦争でもなく、対外戦争ですらない南北戦争なのである——この内戦で実に 61 万人が死んでいるというから驚く）。

既に述べたが、統一国家としてのドイツが出来るのは 1871 年——明治 4 年のことである。それまで、分封されていた小領主たちをプロシア主導で帝国に統一するのは鉄血宰相オットー・フォン・ビスマルクである。バラバラであったドイツ民族を統一しないことには、英国やフランスとの競争に勝てないとの危機意識があった。時代は 19 世紀後半——帝国主義の世であった。1871 年は前年に始まった普仏戦争が終結した年でもある。たれもがナポレオン以降、国民皆兵制のもと（19 世紀後半から 20 世紀初頭には大抵の近代国家で常識となった徴兵制度は 1793-94 年のフランスの国民総動員法が始まりとされている）大陸軍国となったフランスが、ド田舎の出来星新興国に過ぎないプロシア=ドイツを鎧袖一触にするだろうと見ていた。ところが実際は逆になった。セダンの戦いでは、10 万人の将兵共々、ナポレオン三世が捕虜になるという喜劇的結末で、玉（ぎょく）を盗られたフランス第二帝政はあっけなく崩壊する。フランスにとっては屈辱の記憶だろうが、プロイセン王ヴィルヘルム 1 世のドイツ皇帝への即位式は、パリ陥落直前のヴェルサイユ宮殿鏡

の間で行われたことは人口によく膾炙している（1871 年 1 月 18 日）――アントン・フォン・ヴェルナーの手になる名画『ドイツ帝国の成立』の劇的な構図をご記憶の向きもあろう。城下の盟（めい）どころの話でない。ドイツ陸軍の強さの秘密は、よく知られるようにモルトケが打ち立てたシステムである参謀本部の制度が戦略戦術一切の統帥を総覧し、これがうまく機能したことにあるとされている。明治政府が、幕藩体制を廃して統一国家となった自らの出自を考えたとき、モデルになるのは欧州の老舗でありエスタブリッシュメントである英国やフランスではなく、ドイツこそが最も適当であると考えたのは、無理のないことかもしれない。明治政府は 1871（明治 4）年から 73（明治 6）年にかけて、旧幕時代から起算して最後の、そして最大の欧米使節団を派遣する。いわゆる岩倉使節である。岩倉具視を全権、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文が副使である。新政府の首脳の半分が国をあけても実地に欧米を観てこようとした真意は、近代化のモデルをどこの国にすべきかにあった。コピペ元の探索である。旅程はアメリカを手始めに、欧州へまわり、ロシアを経て、戻ってくるものだったが、大久保も木戸も最も強烈な印象を受けるのが呱々の声を上げたばかりのドイツであった。自らの映し鏡のように分邦制の歴史を持っている。なのに、強力な中央政府の指導のもと、富国強兵により帝国主義競争の列強にあとから割って入るドイツが旭日昇天の勢いに映った。以降、明治政府は、陸軍の制度はもとより、医学、憲法もそうだが、ことごとドイツを近代日本のモデルにした。教師と生徒の非対称関係がここに始まる。

明治日本は昭和期日本の狂信的侵略主義国家ではなく、当時の常識に準拠したプラグマティズムの国であった。日本人であるならば、若々しくも溌剌とした青年がひたすら欧米の背中を目指して駆け上がっていく「坂の上の雲」の時代と見てやりたいと思う。海軍制度に関して英国をモデルにしたことを殆ど唯一の例外に、多くをドイツ・モデルにした明治日本を「坂の上の雲」の国とみるならば、日本の近代化は大いなる成功を収めたとみることができるだろう――過渡期には強力な中央集権制による開発独裁が効率的であることは現下の途上国でも事情は同じである。が、負の影響も大きかった。なまじの成功体験が、先生のやること為すこと全てを無謬だと信じ込んで、どこまでも真似しようとする――こんな生徒が大成するかを考えてみればよい。「坂の上の雲」の明治を経て、大正デモクラシーにより普通選挙（1925（大正 14）年）が行われるようになった。が、当時の日本は、例えば同時期の英国のような成熟には至っていなかった――外生的理由で始められた促成の近代化では市民社会の伝統を生むには短すぎたのだ。昭和初期の日本にあっては、政党政治は全く以てうまく機能しなかった（いまも政党とメディアのお粗末さは当時と大差ないけれど、国民は遙かに成熟している）。世界恐慌が起きると云ったタイミングの悪さもあったろう。また、20 世紀に出現した――オルテガが言う･･･大衆社会の影響なかんずくメディアの大衆扇動も大きく与ってのことだけれど――結果として国家の意思決定プロセスに陸軍の介入、否、支配と云うべきか――を招いてしまう。当時としてはまず健全な立憲君主制だった明治日本が、侵襲され、圧殺され、ついに滅んでしまう昭和前期

の 20 年間は、帝国陸軍なかんずく参謀本部で統帥の任に当たる若い軍事官僚たちが暴走すること――それもヒットラーのような特定個人によるものと云うより、個々が集積した無責任な組織総体として――に依る軍国日本の転落の歴史と言ってよいだろう。この転落史の要所々々で先生と仰ぐドイツへの片思いが影を落とした。

ナチスドイツへの一方的肩入れから陸軍は三国軍事同盟を推進しようとする。一方のヒトラーは日本を対等なカウンターパートなどとは毛ほども思っていない。小賢しい東洋のサルどもが先生々々と仰ぎ奉ってくれるのを幸い、うまく利用してやろう位の魂胆だったろう。何も知らぬ哀れなる軍国日本としては、反共（反･共産主義）の枠組み、具体的には反ソ連の連合としてドイツ、イタリアとの同盟を指向するのだが、ヒトラーはスターリンとポーランド分割の秘密協定のもと突如、独ソ不可侵条約を結んでしまう。1939（昭和 14）年 8 月 28 日に「欧州の天地は複雑怪奇なる新情勢を生じ」との迷（名？）文句を残して平沼騏一郎は内閣総辞職する。モーション送りまくり、かつ秋波をそれなりに送られていると思ってきた相手に、突如、自分の仇敵を新しい彼氏ですと紹介されたようなものだ。センセイーそんなこと聴いてませんよ、と云ったところだろうが、センセイにしてみると押しかけ門人のごとき連中をそもそも同類の友人などとは思ってない。この程度の肩すかしなどどってことはなく、片思いはそんなことでは覚めはしない重症だと見透かされてもいた。実際、その通りになった――ああ、なんと憐れな我が日本。

第二次大戦が始まった当初、ドイツの勢いは「電撃戦」そのままに向かうところ敵なしの観があった。英国、フランス主体の連合軍をダンケルクで破って英国を大陸から駆逐すると、1940（昭和 15）年 6 月パリは陥落し、ついにフランスは降伏する。当時、日本は資源獲得のために仏印へと南進策を画策していたから、これを観て「バスに乗り遅れるな」とばかりに、陸軍も海軍も日独伊三国同盟に突き進む（1940（昭和 15）年 9 月 27 日締結）。たった一年前に煮え湯を飲まされているのに、である。この三国同盟を日米開戦の Point of no return とする歴史家は多い。独ソ開戦後のバルバロッサ作戦では確かにドイツは破竹の勢いだったが、西部方面のバトルオブブリテンではドイツ空軍は勝てず、ドイツの英国上陸はもはやあり得ないことは、現地にいる冷静な観察者ならたれもが推量できたろう。実際、現地公館の駐在武官からそのような情報が陸軍参謀本部へと上げられていた。が、顧みられることはなかった。と云うよりは、主戦派の少壮陸軍官僚たちに握りつぶされた。条約締結して南進策を採れば、それがアメリカという虎の尾を踏むことになるのは、いかに侵略妄想に浮かれて自他が見えなくなっていた統帥指導部とてさすがに判っていた筈だ。どうして、もう少し様子をみてみる、数ヶ月だけ何もせずに時をまつ――その程度の慎重さが持てなかったのかと思う。センセイをあがめ奉るばかりに肩入れした結句、国家をあやまることになった。

しかし――戦後も日本人のドイツ観はさほど変わっていないのだ。

相変わらずの片思い――。

わたしたちの西欧拝跪の感覚は抜きがたくも実に切ないものがある。

同じ敗戦国ながら驚異的な経済復興を成し遂げた国との親近感もある。わたしが学生の頃の理工系学生の第二外国語と云えば、その多くは――私もそうだったが、ドイツ語が選択されていた（今次の滞在で私の中に全く痕跡が残っていないことを知ったけれど）。技術立国の先駆けとの尊敬のまなざしは戦前と変わらない。

一方のドイツはどうだろう。就中、最近のドイツの日本観はどうか？

驚くべきことに、支那朝鮮かとみまごうばかりの反日一色なのである。少なくともメディアは。Arne Traulsen 教授は「ドイツ、少なくとも自分がフクシマをみて反原発を強く意識したのは、“あの”（技術大国たる）日本ですら制御の翼を失った炉心をコントロールできなかったんだから、ましてや自分たち（ドイツ）に出来るわけない、との考えからです」と言うが、それは彼の知性とデリカシーが言わせているもので、ドイツの一般の人々やそれをあおったメディアさらには総体としてのドイツ人の底意は必ずしもそうではなかろう。このあたり、三好範英氏の『ドイツリスク―「夢見る政治」が引き起こす混乱』（光文社新書、2015 年）がよいテキストになる。どうして彼らが、福島原発事故の折り、リスクを非常に誇張して殆どヒステリックになってネガティブに偏向報道したのか。自分たちがしたように過去と真摯に向き合わず歴史を修正しようとする安倍内閣と日本を中国と一緒になって非難するのはなぜかを知るには、深くも鋭い現地レポートである。多くの日本人が、ドイツがそんな具合に日本を見ていることすら知らない――ノーテンキなもんです。

ノーテンキ過ぎる片思いの一旦は、無論、我ら側の責に求められるべきだろう。が、なにごとも欧米を一等とする西欧拝跪の感覚や、大きな言語障壁が彼らの真意をくみ取りがたく且つ自らのそれを伝え難くしていること、なにより島国で他から隔絶されていることが、まず大きく影響している。一方、ドイツ側の因はと云えば、三好氏に依れば、pragmatism（この言葉自体はアメリカの政治思想から出てきたものだが）の英国が冷静で合理的にものを観ようとする（その割には、先頃のユーロ離脱の国民投票は意外な結果だけれど）のに対して、ロマン主義のドイツはあるべき理想に現実を合わせようとする思考にとらわれる傾向にあり、ことごと冷静さに欠けるエモーショナルな反応を採りがちな性向に与ってのことだという。どこかわが隣国のメンタリティに似ている（大陸に連なる国か島国かという対比も対称形を為しているように思われる）。ユーロ危機、シリアや中東からの移民の問題、ロシアが意図する欧州をアメリカから離反させること等々、欧州が直面するのっぴきならぬ諸問題を考えるとき、今や EU を主導する立場に立ったドイツは大きなリスク要因となるのではないかと三好氏はみている。UK 退場後、俄然、欧州のさきゆきは不分明になった。

現下ここドイツは揺れ動いている。

この数週間でテロを含めた無差別殺人が何件も起きた。多くがイスラム過激思想に影響を受けた者や移民、難民の問題に関連しているという。ギリシャをはじめ、通貨経済危機の記憶も新しい。最近のメルケル首相は難民政策擁護のパフォーマンスに躍起になってい

るけれど、EU の理想を奉じるのは間違いだったのではないかとの反問が起きるのは無理からぬこと――。が、EU 発足により、実利的なメリットを最大限に引き出したのは他ならぬドイツなのである。住んでみた実感からすると、この分厚い豊かさは、ちょっとやそっとの動揺などではびくともしないだろうと思う。皮肉なことにこの盤石の豊かさがあるから、命からがら逃げてくる人々を一層吸引してやまない。――はまり込んだジレンマの淵は深い。

理念はどうあれ EU という壮大な実験の収支決算をいま迫られている。この先、この国はどちらに向かうのか。

（Aug.20. 2016）

ドイツ人の日本人観

片思いの稿で、ドイツ人の基調的日本人観は寧ろネガティブだと書いた。またぞろ、あの右翼反動がテキトーなことを言っているぞ、との声がここまで聞こえる。私（だけ）が言っているのではない。他の人が（も）言っているのだ。少なくとも、ドイツのメディアやリベラル派の立てる論を見る限り、彼らの深層心理にある日本および日本人観には、日本がドイツをなべて尊敬と憧憬をもって眺めているほどの好意はないと知るべきである。いうまでもなく、だからドイツ人と日本人との個々の関係も幾許かこの影響を免れ得ないなどとは言うつもりはない。全くない。おまけに、近隣国ほどの接触があるわけでもなし、利害が角逐するわけでもないから、支那朝鮮とは事情ちがって、何かの拍子に表層に顕れる以外には、普段、意識されることもない。

我が日本の誇る大数学者である高木貞治（1875（明治 8）～1960（昭和 35）年）の『近世数学史談』におもしろいはなしが載っている。いうまでもなく高木と云えば類体論で大きな仕事をした世界的数学者である。高木は、岐阜県本巣郡一色村数屋生まれ、1984（明治 27）年に東京帝国大学理科大学数学科に入学し、のち東大数学科の第三講座（代数学）の初代担当教授の内命を受け、1989（明治 31）年から三年間のドイツ留学を命じられる。留学翌年春からはゲッチンゲン大学に移るが、当初、高木はフロベニウス（フロベニウスの定理を思い出した人は数学通である）が主導するベルリン大学に草鞋を脱いでいる。「ベルリンは、例のワイエルシュトラス、クロネッカー、クンメルの三尊の揃っていた隆盛時代の直後であった。その三尊はみな亡くなって、後継者のフックス、シュワルツ、フロベニウスの時代になっていたが、何分数学といえばドイツ、ドイツといえばベルリンと言われていた時代で」と言っている。当時のドイツ人には、ついこのあいだまで各邦分裂していたドイツ民族を帝国として統一し、普仏戦争以降、僅か三十年で欧州の一大強国としたことへの強い自信と自尊があった。くだんのフロベニウスが学部長かなにかの就任演説をやった時、ドイツの科学の進歩を大いに自賛したらしい。曰く、外国人が頻りにドイツへ科学を勉強に来る。アメリカからも来れば、何処からも来る。近頃は日本人すら来る。今に猿も来るだろう――と言ったそうである。まさかそういうことを公開の就任演説で言った訳でもあるまいが、いくらか誇張して話されたのだろう、と高木は伝聞として記している。いずれにせよ一等の知識人にしては、じつに下劣なジョークである。が、当時の欧州人のアメリカ観は大凡こんなもんで、さすがに日本人よりは席次は上にしてやるが途上国だから当然吾らを範とすべきと云う暗黙の感覚があった。その日本人はと云えば、サルよりは番付一枚だけ上だけれど、猿人類といった評価がところか。人類とサルとの境界線上の存在が、万が一にも日露戦争（1904（明治 37）年）でロシアを負かすとは思っていない。なにもこの逸話はドイツ人に限ったことではなく、押し並べて当時の西洋人の東洋人観、日本人観とはこんなものだったろうし、短日間に急成長したドイツとしては一層

そう云う見方に捕らわれがちだったのかもしれない。さすがに今日日このような言明を聴くことはないが、彼らの中に黄色人種に対する軽蔑の感覚が全くなくなったと誤解するのはナイーブだろう。

戦後のドイツ人の日本人への反感――と云っては強い謂いになるなら、面白くない存在と観る感覚――は、人種的民族的なことからやや離れた淵源からきている。もろん、基底にある偏見は幾許か関連なしとはしない。

ナチのユダヤ人虐殺は、その規模と残虐性からいって、ちょっと人類史上類例が上げられない。戦乱にあっての皆殺しや民族浄化は史上いくらでもあったが、100 万人単位で人を殺す技術がない昔は、虐殺と云ってもナチの所行からみれば、どれも牧歌的レベルに過ぎない。20 世紀の科学技術は悪魔の計画を可能ならしめるに十分なものがあった。原爆もまた然りである。

大学の教養教育の教科書を以下に引いてみる。加賀美雅弘氏ほかの『ヨーロッパ学への招待』（学文社）から。

> 第二次世界多戦後、ドイツ連邦共和国では、ナチス･ドイツの下で行われたジェノサイド、多くの殺戮行為と不法行為の責任を求められ、被害者への補償、これらの犯罪行為を行った個人の訴追、これらを語り継ぎ、二度と繰り返さないための歴史教育・文化事業を行ってきた。これは、「過去の克服」という言葉で知られる。その努力は、世界的に知られ、アジアにおいて加害者としての戦争責任を問われながらこれに正面から向き合ってこなかった日本との対比において賞賛されてきた。

加賀先生がどんな方だが存じ上げないが、社会地理学がご専門の東京学芸大学の教授でらっしゃるらしい。ごく自然に反日的立場を取ることがリベラルであるべき大学人として普通のことだとお考えのようだ。例に漏れずにステロタイプな、「素晴らしいドイツに対して、蒙昧なニッポン」との謂いである。紙幅の制約もあって、一々反駁しない。ここで確認したいのは、戦後のドイツおよびドイツ人は、自らがとんでもないことをしでかしてしまったと云う認識から出発している点である。これは全くその通りなのである。何しろ 600 万人からの非戦闘員を殺害したことは、どこをどう糊塗しても揺るがない事実だから、さすがに逃れようがない。よって、戦後のドイツとしてはひたすら反省と謝罪することから始めるしか方途がなかった。およそ日本人と異なり、自分側に非があってもそれを決して認めず、あやまることをしないドイツ人（これはいろいろなところで書かれているが、ここではドイツへの肩入れが一方でない人の手になるテキスト、小塩節『ドイツ語とドイツ人気質』を上げておこう――興味深いエピソードが載っている）をしても、こればかりは謝るしかなかった。が、ドイツが自賛する「過去の克服」では、意地悪くみると、巧妙な仕掛けになっていて、とんでもないことをしでかしたのはあくまでヒトラー以下の

ナチであって、悪いのはナチスであり、しかしナチスの台頭と暴走を阻止出来なかったドイツ人としては、責任は逃れられず、故にこうべを垂れる、とのレトリックになっている。ドイツ人がした犯罪を全てのドイツ人が引き受ける、との一見、誠実な態度にみえるが、ドイツ人にはヒトラー以下のナチス一味の悪いドイツ人とそうでないドイツ人がいた、そして戦後の吾らドイツ人は後者からきているとの前提に立っている。さすがに、日常生活にあって決して謝ることをしないドイツ人だけのことはあって、晦渋だが巧妙なレトリックである。

第二次大戦終結 40 周年記念で、当時の西ドイツ（連邦共和国）大統領のフォン・ヴァイツゼッカーが行った追悼演説での一節「過去に目を閉ざす者は未来に対しても盲目になります」、「心に刻むことなしに和解はあり得ない」はよく知られている。さぞや朝日や進歩派（要するに反日をテーゼとする日本人）などは、ドイツの「過去の克服」の真摯さ、それに引き比べて小狡く韜晦しようとする日本、戦争法で右傾化しようとする日本およびアベ内閣と云うコンテクストで使いたかろう（随分前の話だけれど）。しかし、ドイツの辿ってきた「過去の克服」には、そういったきれい事だけでは説明できない「不都合な真実」が持ち上がり、それをめぐって国内外で大論争が持ち上がるといったいきさつがあることを知らねばならない。が、いつものことだけれど、こう云ったことは殆ど伝えられない。1990 年代後半に持ち上がったゴールドハーゲン論争では、ナチスだけにすべての罪科を負わせることで一般ドイツ人を免罪しようとしてきた論理が破綻を来していることが明らかにされた。ナチスだけではなく、「善良であったはず」の国防軍（具体的に争点になったのはポーランド占領後に駐留した 101 警察予備大隊）もユダヤ人殺害に積極的関与があったことが実証されたのである。

一寸はなしが飛ぶ。戦後、「過去の克服」を進める中にあって、ドイツとポーランドは常に加害者と被害者との非対称関係にあった（ゆえに日本と支那朝鮮になぞらえる向きがあるが、後述するようにハナシはそう単純でない）。ポーランド側は第二次大戦で死亡した 600 万人（これは当時の人口からすると莫大な数である）の多くが直接、間接にナチスの惨禍が引き起こしたものだとしてきたが、実際には、この少なからぬ人数がソ連軍によるものであることが現在は判明している——史実を語れるようになったのはソ連崩壊以降のことだ（さすがに近代を起こした欧州の一角にあるだけあってポーランド（コペルニクスの故国である）にはどこかの国々とは異なって fact を受け入れる合理性がある）。じゃあ、ポーランド人の被害者の地位（？）は揺るがないかと云えば、これもそうは単純に割り切れるものではない。2001 年のトマシュ・グロス『隣人』がきっかけになり、ポーランド国内で、これまでナチスの仕業とされてきた 1941 年の 7 月 10 日のポーランドはイェドヴァブネという小さな町で起きたユダヤ人の大量虐殺が実はポーランド人の関与によるものだったことが明らかにされ、被害者一辺倒の自国史を見直さざるを得ない大きなきっかけになった。

つまり、ナチスドイツがユダヤ人を 600 万人から殺害した事実の表裏には、ユダヤ人迫害は何もナチスやドイツだけの専売特許ではなく、欧州裏面史にはどこの国にもみられたことで（とくにロシアでは著しかった）、戦火の混乱の中で、規模の違いはあれども、被害者とされてきた人々すらもユダヤ人を殺戮していた事実があったのである。現実は、被害者が被害者を高唱できない複雑で錯綜した構図になっている。だから、ナチスドイツだけが悪玉だったとして、直接の道義的責任を棚上げした戦後ドイツ人が、しかし責任は引き受けますと深くこうべを垂れるとき、それが本当に誠実な態度かと周囲が疑問を呈することはなかった。よくよく調べると被害者も加害者になるかもしれないから、謝罪は受け入れて和解し、互いに過去に向き合う真摯な人々として振る舞った方がよい——あれこれほじくり出すと彼我ともに不都合な深みにはまる。過去はすべて押し流すに越したことはない。加害者にとっても、被害者とされてきた国にとっても。

一方のドイツには奇妙な精神的錯倒がおきる。「過去の克服」の過程で、繰り返しくりかえし謝罪と反省を繰り返しているうちに、ドイツ人はひたすら謝り続ける自らを次第に誠実で高潔な人々だと錯覚するようになった。自己——この「自己」は本当の自己ではないすり替えが行われているのだが——をひたすら否定することを繰り返していると、マゾヒスティックな自己陶酔を喚び、しまいに自分たちだけが辿り付ける道徳意識へと昇華される。結句、同じような事情を抱える日本および日本人が、自らが為したような全面的な謝罪と反省をしないのを道義に悖ると考えるようになるのは十分あり得ることだろう。だが、しかし「同じような」事情かどうかは、その論の正否を論じる上で、なお決定的に重要である。

ヒトラーの悪魔の所行は、優生学的発想から、まず障害者を安楽死させること——いわゆる T4 作戦から始まった。国内から批判の声が上がると、1941 年 8 月にヒトラーは表面的にはガス殺の中止を命じるが、すでにこの時点で 8 万人の障害者が殺されていた。ユダヤ人ではない。自国民のドイツ人を、である。T4 作戦の殺害施設で培われた技術と組織がアウシュヴィッツをはじめとするユダヤ人の絶滅収容所に生かされたことは言うまでもない。1942 年 1 月 20 日、ベルリン近郊のヴァンゼー湖畔にナチの指導者とドイツ政府高官が集って、「ユダヤ人問題の最終的解決」を図る方策が具体的に確認された。それまでにナチが作っていた強制収容所（Konzentrationslager 略して KZ）——第一号はヒムラーが 1933 年にこしらえたダッハウ——とは発想を異にし、殺害そのものを目的とした施設、いわゆる絶滅収容所（Vernichtungslager——これは後世の造語であり、当時のドイツ政府は正式な行政用語としては KZ を用いていた）の設置である。最大の絶滅収容所として建設されたのが、ポーランドの古都クラクフから西方 60 キロに位置するアウシュヴィッツ収容所である。こうした計画的で周到な殺害——それも 600 万人の非戦闘員を殺したことと、日本の中国への侵略のプロセスで為した悪行は果たして「同じような」ことだろうか。それを云うと数が問題なのではない、他国に押し入った上で人を殺（あや）めたこと自体が問題なのだと学級会的論理を立てる方がいらっしゃる——それも日本人に。確かに、この

言明自体は正しい。が、肯（うべな）うことは出来ない。被害者が道義的責任だけを問うのではなく、70 年以上前のことを現下の内政や外交上の角逐に政治利用し、何らかの実利的対価を、出来る限り長きにわたって、多く引き出そうとする意図をもつ限り、犯罪の量刑と同じく、その悪行は定量的かつ公明に見積もられなければならない——そうでなければ事件事故の民事解決がはかり得ないのと同じことである（為念（ねんのため）いうと、北朝鮮以外とは外交上の法的問題は解決済みである）。こうなると数は、俄然、問題なのである。連中が殆ど青天井に数字を膨らました南京大虐殺 30 万人（30 万人は白髪三千丈式の支那でいう「たくさん」の意味だと云う被害者としての怨恨の情は、勿論、解らなくはない——けれど前記したように正確公明に見積もらなければ「同じような」事情か否かを言うことは出来ない——現在、正気の歴史家で 30 万人をまともに信じている者はいない）ですら 600 万人とは比べるべくもない。かつ、それが戦闘戦乱に伴う偶発的なことではなしに、ナチスが為したように計画的、確信的なことだったろうか。そのようなことを裏付ける証拠は（30 万人という数の問題も含めて）これまで一片も確認されていない。石井四郎軍医中将の 731 部隊の存在が実態より誇大に伝えられているが、それですら絶滅収容所の犯罪性とは同列には論じられないものだろう。連合国の側に全くの野蛮がなかったとも言えまい——どころか原爆を落としたのは「正義の味方」である筈のアメリカだ——念入りに二発も。いま現在の常識でもって、帝国主義の時代からそう春秋を経ない当時の行いを論理的に裁くことが果たしてどれだけ妥当なことなのか。

為念（ねんのため）いうが、だから日本は中国を侵略したのではない、悪行はなかったなどと言いたいのではない。30 万人は余りの誇張で、なべてナチスが行った悪魔的所行と「同じような」ことが日本によって行われた事実などなかったと言いたいだけだ。彼我認識の差を埋めよ（感情問題がある以上、土台、そんなことは出来ない）というのでなく、ただ史実の確認をすべきだと言っている。

要するに、ドイツ人が誇る「過去の克服」を盾にとって、彼らが日本人に対して道義的優越を感じる合理的根拠など何も存在しないと言いたいのだ。

冒頭の引用に戻ろう。「戦争責任を問われながらこれに正面から向き合ってこなかった日本」と云う指摘は、くだんの著者の反日的底意を別にすれば、正しい認識だと思う。誠に遺憾である。どうしてこうなったのだろうか。とやかく言われたときにきちんと説明する上での言語障壁が大きいことがあるだろう（遅きに失しているが、外務省は、漸く、確認さている史実を全面に出し、流布した巷説、誤解を解こうと努力し始めた——もちろん英語で）。自分に非があった以上、規模だの人数だのの委細にわたる事実認定は措いておいて、相手の言うがまま（30 万人虐殺、従軍慰安婦、強制連行）を認めて先ず謝ってしまうというのは、言い訳しないことを潔しとする日本人特有の価値観からきている。が、日本以外ではそんなことは通用しないし斟酌もされない。GHQ の初期占領政策（つまり当時の日本人から牙を抜くため、思想的洗脳を目的としてアメリカ型デモクラシーを扶植する）も与ってのことだが、戦後の日本は、昭和初期の二十年間を全て「封印」すること

で、「あの戦争」に向き合うことを避けてきた。どうして、国民も国家も滅亡の淵に追い込み、周囲の国々に大きな迷惑をかけるような、そして成算のまるで立たないあのような愚かな戦争をしたのか。これに関して自ら問うことを戦後の日本人は怠ってきた。避けてきたのだ。面倒だったから、それよりも復興と豊かになることの方が優先されたから、そのほかにも様々な複合的理由が上げられるだろう。だが、考えてみて欲しい。このこと以上に大切な論点がはたして戦後日本の言論空間にあっただろうか。これは、日本および日本人にとって、西欧に端を発する近代が一体何であったのか、自らの出自を問う、けだし吾等には避け得ぬ根源的な問題ではないか？

しかして、冷静に考えるなら、我が親世代を含む先人先輩たちが営々築いた物質的繁栄の果実を放埒に喰っているに過ぎぬ私を含む現下の日本人にはそれを難じる資格などないのかもしれない。ただ、わたしが遺憾とするのは、日本人自らによる事実確認と総括が行われていれば、ナチスと戦前日本を同一視して、だから戦後日本はなってない、過去を克服したドイツを見てみろ然の戦後主義的ステロタイプを唱える人は、（外から言われることは、兎も角）少なくとも日本からは出なかったと思われる点にある。

（Aug.27. 2016）

エコロジー

1960 年代、サンフランシスコのヒッピーから、若者の Zeitgeist（時代思潮）としての反戦とフリーセックスが出てきたように、1980 年代のエコロジストから緑の党が出、現下の教条主義的ともいうべきドイツの反原発運動がわき起こってきた。両者には、リベラル、既存の権威や体制への反抗という点で共通項がある。60 年代の若者たちの反体制運動は世界中で学生運動を呼び起こしたが、しまいに瘧（おこり）がさめたように収束した。日本でも事情は同様だった。50 年代のスターリン批判やハンガリー動乱に幻滅した理想主義的左派学生は、共産党と袂を分かち、全学連となって 60 年代の闘争期を過ごす。コミンフォルムが主導する共産主義という方向性を失ったあげくの原理主義化もしくは退行現象と見られなくもない。一部の跳ね返りは連合赤軍など過激行動に走るが、多くは 1960（昭和 35）年の安保闘争を頂点に流れ解散した。普通に就職して、高度成長の前線に立って奮闘、ごく普通の社会人となっていった。が、彼らの世代（だけでなく彼らの下の世代にも少なからぬ影響があった）に通底するのは、リベラルとは反体制——つまりお上（政府や上役、組織といった公的権威）のすることに何でもかんでも反対を唱えていること——を意味し、知識人の証としては岩波の『世界』を読まねばならず、朝日新聞の熱心な購読者である点ではなかろうか。反原発、反戦争法案などと唱えている少なからぬ連中は、これらの世代ないしは影響を被った世代に属し、かつての全学連、いまシニアの自称市民派、地球市民というのが多い。嗤ってはいけない。三つ子の魂百までとはよく言ったもので、すり込まれたジョーシキは容易にはかわらないのだ。20 世紀前半の「国家主義の季節」では、国とは、個人に対して、財も自由も、ときには生命さえも要求する、実に重たく冷たい頚木（くびき）であった。それらが退場した戦後世界では、共産国家、独裁国家を除けば、デモクラシーが社会の基盤的常識となり、個人はまったく開放され、反体制は実に手軽な「モノ」になった。何より、戦前の「主義者」のように命を張った生き死の事業でなくなったから、文化的ポーズや表象レベルの重さしかない。思想的純度という点では、どこか軽く（実際、軽チャっぽい）、いかがわしい。日本で反アベ内閣、反センソー法を叫んでいる連中の性根と現在のシナにおいて共産党をあからさまに批判するそれとでは、軽重の点で、到底、同列には見られまい。根性がちがう。わたしは、ヒッピーに、ロックンロール、学園紛争も、エコロジー、反戦、反原発も、戦後の実に軽くなった反体制ファッションから出てきたきわモノだと見ている。

ナチスの所行を悪魔のそれをする戦後ドイツは「過去の克服」を余儀なくされた。このことは既に述べた。この戦後ドイツのルサンチマンとアングロサクソン流プラグマティズムに対置されるドイツ人のロマン主義とが結びついたとき、左派知識人の唱える理想主義が受け入れられる土壌は、戦後日本より遙かに大きかった。今やドイツにあっては反原発以外の政治勢力はなく、原発と共棲せざるを得ないとの論——理性的実際的にはごく当たり前の考え方——をたてれば公的立場を失いかねない。

緑の党は、1980 年 1 月に当時の西ドイツはカールスルーエの地方政治組織として結成された。1983 年には 5%条項（ドイツ連邦議会ではワイマール期の小党乱立がナチスの台頭を許したことを重く観て得票率 5%以下では議席は配分されない――むかし斜会党とかいったなんとか党などはさぞや反対するだろうが日本でも導入してはどうか）を突破して議席を得た。1986 年 4 月に起きたチェルノブイリ事故を受けて、1987 年連邦議会選挙で大躍進を遂げた。89-90 年のベルリンの壁崩壊に際して統一に批判的立場を取ったため一時党勢は衰え、連邦議会の議席を失うが、統一後の 1994 年 10 月選挙で復活した。1998 年からのシュレーダー政権ではフィッシャーを外務大臣に送って連立政権を担ったが、コソボ空爆に加担したとして左派勢力から激しく批判された（NATO の一員としての義務を履行しただけなのだが――あのドイツが戦後はじめて他国を空爆する挙に出た――とアメリカで大きな論議をよんでいたことを――丁度その時期わたしはアメリカにいた――憶えている）。が、彼らが唱える、脱原発、エコロジー、フェミニズム、ジェンダー、地方主義――どれも私には気にくわないものばかりだけれど――は、現下のドイツの政治土壌に根付いているように見える。現首相のメルケルは 2011 年のフクシマ後、脱原発を高らかに宣言している。単に政治的ポーズで言っているのでなく、本気で言っている。彼女だけでなく、ドイツの人々はまじめにそう思っている。でなければ、2000 年以降、家庭用電力料金が 2 倍になり、それを甲論乙駁しながらも人々が受け入れてきた事実を解釈できない。消費税率を数%上げるだけで内閣が倒れるだろう日本では考えられぬし、アメリカなら暴動が起きているだろう。だから立派だと言っているのではない。理想に殉じようとの意気はよしとして、「過去の克服」と同様きれいごとではないのか――実際、系統（つまり電線）は欧州中に繋がっているから原発依存度の高いフランスからいざとなったら電気が買えるわけだ。余計なお世話だろうけれど、合理的で本当に賢明な選択なのかを疑うべきではないかと思っている。

はなしは随分と小さいけれど、建築界にも似たようなトレンドがあった。自然回帰の被土建築だの、緑化建築だのが受けて、ドイツのエコロジーに端を発する建築運動バウビオロギー（建築生物学と訳されている――聞いただけでは何のことだかわけの判らぬ言葉だ）が日本の建築界でも 90 年代に随分ともてはやされた。ヒートアイランドの人々（わたしは違いますよ）がマッチポンプ宜敷く悪ノリして、屋上緑化がエコで省エネだと言い出したのはその後のことだと思う。

エコロジーが政治の世界に闖入し、結句、電気代が倍になってしまった現実を知るとき、彼らドイツ人のように理想主義に殉じるコストを受け入れる覚悟が日本人にあるかと自問するなら、それは「多分ない」との答になるだろう。が、それが健康なのなのではないかと思う。私たちとしては、バウビオロギーが流行ったように、お題目としてエコロジーを唱えておくのがせいぜいであり、それが理性的選択と云うものではないだろうか。

ドイツでは、輸入ワインなどを除く飲料水やビールなどの瓶類には、あらかじめ 10 ユーロセント程度のデポジットが掛けられていて、大抵のスーパーには回収用の自動販売機のような大きな機械が置いてある。これがなかなかよく出来ていて、瓶にあるバーコードを読

んで、飲料水なのかビールなのかといった瓶の種別と容量をたちどころに認識し、スーパーで使えるクーポン券を吐き出してくれるという優れもの。こう云うエコロジーは是非まねたいところである。

（Sep.3. 2016）

鷗外のこと

鷗外、森林太郎の実家は、代々、石見国津和野藩の侍医の家柄だった。彼は文久 2（1862）年生まれであるから、医者に免許など要らなかった時代から、国家が近代医療制度を整備する黎明の頃に学齢期を迎えた。当時の武家の、しかも嫡男であるから、必須の学問である漢学を、まず手はじめに習得させられた。余談ながら、明治知識人の双璧と言えば、漱石と鷗外と云うことになるだろうが、この二人は、漢学素養を基盤にもつ最後の世代――押韻の正則を踏んだ方正な漢詩が巧まずものせる世代――に属し、彼らの弟子、たとえば漱石晩年の愛弟子の芥川くらいになると、もはや幼少期初等教育としての漢学はなく、漢学は血肉でなく、教養の対象であった。

さて、その少年鷗外である。林太郎少年の物覚えが異様によいことに周囲は驚嘆し、この神童の将来に期待する。わずか 12 歳で医学校（現在の東京大学医学部）予科に入り、明治 14（1881）年、19 歳で本科を卒業する。定員 30 人の本科生の大半は彼より年長者ばかりであったが、その中にあって林太郎は堂々の席次 8 番での卒業であった。漢学もそうだが、ドイツ語にも深く通暁し、性もと語学、文学の才に恵まれていたわけだが、残念ながらその卒業席次ではそのまま大学に残って学究の道に進む、との父親はじめ周囲がこの少年に期待した素志は果たせなかった。学卒席次ドンベでも何でもいいから博士課程に進んでみないかと口説きかねない我が身からすると、まるで異星での出来事である。無論、当時の大学と現下の大衆化しきった大学とではまるで中身が違う――大学と中学との差違、否、幼稚園との落差と言うべきだろう。医学者の道をあきらめきれない林太郎は、卒業後、父・静男が北千住で経営する医院を手伝いながら、文部省派遣留学生の制度によりドイツへの医学留学を目指す。が、ひょんなことから大学卒業の年の暮れに陸軍省に入省、軍医の道を歩むことになる。その 3 年後の明治 17（1884）年、念願叶ってドイツへの留学の機会が巡ってくる。軍事医学の研究のためドイツへの官命留学である。鷗外としての筆名がつとに騰がるはるか前のはなしである。

『独逸日記』は、鷗外が勇躍、ベルリンに到着した翌日の明治 17 年 10 月 12 日に書き始められ、留学を終えて帰朝する年、明治 21 年の 5 月 14 日で終っている。前記したように、彼は明治以前の教養人としての漢学教育を受けているので、当時の常識に倣って日記は漢文で書かれた。この日記は忘備のためのもので、彼は発表のため和文に書き換えるところまでしていながら、生前なぜだかこれを発表することがなかった（先に述べた筑摩から出ている森鷗外全集 第 13 巻に収められているものは和文体のそれで、オリジナルの漢文体原稿は失われている）。

本務は軍事医学の研究であるから、到着後、まずライプチッヒ大学でホフマン教授の指導を受け（明治 18 年 10 月 11 日まで）、その後 5 ヶ月ほど（19 年 3 月 7 日まで）ドレスデンに滞在して特別に参加を許された軍医講習に出ている（その時の指導教官の所見がベルリ

ンの森鷗外記念館に展示されていた――それによると彼のドイツ語は会話も流露としたものだったらしい)。その後、ミュンヘン大学へ移り、そこに明治 20 年 4 月 15 日まで留まると、滞独最後の期間はベルリン大学で当時既に細菌学の権威として盛名轟いていたコッホ教授の指導を受けている。この慌ただしいとも云える留学計画は、軍医総監である橋本綱常（鷗外の留学開始時点は陸軍軍医監の身ながら帝国大学医学部教授を併任していた――余談ながら橋本は福井藩の御典医の家の出身で、実兄は安政の大獄で獄死した橋本左内である）の指示によるものだと云う。明治国家としては、最新の陸軍軍事医学の全てをドイツから移植するに、その任を若い鷗外に託したのであり、この時期の留学組はなべてそうだが、あちこちに移動しあれこれ貪欲に学ぶことが求められた。若き明治国家の行く末が、これまた若き留学生たちの双肩にかかっていたのだ。現下からは望むべくもない、羨ましい時代性――まさしく坂の上の雲である。鷗外も然り。この公式記録風の在独スケジュールを見ると、まずは、言われたとおり、留学の実を上げるべく学問研鑽につとめる真面目で優秀な官僚の姿が浮かび上がってくる。明治人の実直さ誠実さと言ってもいい。が、日記を読むと諒解されるように、眉間に皺寄せ刻苦勉励する明治の秀才という感じはしない。なにしろ、二十歳を出て幾春秋もたってない若者である。若さというエネルギーも、そして鷗外の場合、才能も何もかもが横溢しているから、一所に留まることなく外にでかけては、大いに在欧生活を楽しみ、のちのち作品に投影されるような恋の如きようなこともあったのだろう。その頃の写真を見ると、彼はなるほど苦みばしった美男である。亡くなった山本夏彦が、鷗外は明治の男性の中でも小男のくちではなかったか、東洋未開の野蛮国からやって来た小人男が、美麗のドイツ娘に惚れられると云うようなことが本当にあったろうか、飾って書いてはいまいか――それを確かめたいけれど、彼の弟子連中は鷗外がいかに小男だったかを、示し合わせたように語ってくれていない云々とユーモラスに書いていた。『舞姫』のモデルになるようなことが実際にはあったとされているが、本当にドイツ滞在中に向こうの「良家」の令嬢と恋に落ちたのかは定かでない。屈折があったのではないか。司馬遼太郎が明治人の憂鬱を語るときに、明治知識人の代表として漱石と鷗外の写真――暗い顔つきをして写真に収まる二人をよく例に出していた。明治 33 年からロンドン大学に官命留学した漱石が、下宿に引きこもって殆ど鬱病だったことはよく知られているが、鷗外からはそんな気配は感じられない。司馬はそれを、英文学が専門だった漱石に対して、医学研鑽を命じられた鷗外――自然科学は人文学と異なり、日本の未開さは、文明の本質的問題でなく、単に技術レベルの問題だけだと楽観が出来るから――の幸いだったのではなかろうかと言っていた。なるほどと納得させられるのだけれど、三文文士としては、恋の蹉跌が、若くも能ひいで誇り高き異国の一男性が心象に幾許かの影を落としたのだとみる方が何倍もおもしろいのだが。

日記に戻ると、随所に、青年鷗外の、明治日本の付託を受けて留学している、との若者らしい客気が垣間見える。

明治 19 年 3 月 6 日に行われたドレスデン地学教会では、講演したナウマン教授が日本および日本人のことを悪し様に言うのに、憤然、その場で討論におよび、後日、ミュンヘンの

新聞紙上で公開討論を挑んだのは有名な話だ。相手の国で相手の言葉で敢然挙手に及んで自説を開陳、自国に注がれた由なき誤解を正そうとする意気はいかにも明治人らしい。学会その他の国際会議における日本人 delegate と言えば、スリー･エスすなわちスマイル、サイレント、スリープと悪口言われて久しい現代のボンクラ学者の端くれとしては、ただ恥じ入るしかない。百万分の一くらいは見習いたいものだ。さて、このナウマン教授である。ナウマン象でつとに有名なナウマン博士は、明治 8 年からお雇い教師として在日、帝国大学初代地学教授をつとめていたが、日本がよほど嫌いだったらしい。嫌いというのは言い過ぎかもしれない。当時も（そして多分いまも）欧州とくにドイツの人士にとって東洋人など人類とは思っていないだけのことで、要するに日本をその程度にしか見ていなかったとの認識の問題であろう。蓋し、東洋君主国の教養人として自負も誇りも高かった若き鷗外としては、どうしても許せなかったのだろう。まるで次元の異なることだが、彼我の違いを実感し、それを相手方の言葉で伝えねばならない非対称性に呻吟した経験ある身には、よくわかる。こん畜生と思うわけだが、畜生獣類とみているのは寧ろ相手の方なのだ。ああ何たる喜劇！

鷗外に比すべくもない全くの無駄飯喰いの客員教授だけれど、こうして滞独して勉強できる機会を心底ありがたいと思う。のこり時間も短くなった。

（Sep.10. 2016）

ベルリン

今次の滞在で、自然豊で美しい田舎町に暮らすうちに、大都会は世界中どこへ行ったとて大差ないと思うようになった。東京も、アメリカや欧州あるいはアジアの大都会と云われるまちも、無論、成り立ち、規模、密度こそ異なれども、何だか似たように見えるようになった。そもそも都市は要請される機能に応じて造られるのだから、風土や様々な制約条件に依って差違があろうと大略同じようになるのは、そう驚くことではないのかもしれない。ベルリンも比較的新しい都会と云う点を除けば、ロンドンやパリあたりとそう違わない。過日、ブランデンブルグ門前で、シャツの胸ポケットにあった 20 ユーロほどの現金を早業のスリに遭ったことが、これまでの都会と異なる印象だけれども･･･。ずいぶん海外を遍歴してきたが、盗人（ぬすっと）おきびき胡麻の蝿の類いに出くわしたのは初めてだ。日本なら二重橋前で被害に遭ったようなもので先ずあり得ないハナシだろうから、流石に人の出入りの激しい欧州の大都会だと妙なところで感心している。

ベルリン――倫敦（ロンドン）巴里（ぱり）紐育（ニューヨーク）に倣って、伯林と書きたい。

岩倉使節のことは以前触れた。

岩倉使節団は明治 4 年 11 月 12 日（1871 年 12 月 23 日）から明治 6（1983）年 9 月 13 日までの 1 年 9 カ月余、米欧 12 か国を歴訪した、幕末期を入れても最大にして、そして最後の対外使節団であった。特命全権大使は外務卿から転じて右大臣となっていた岩倉具視（余談ながら、当時の廟議の名目上の主宰者は太政大臣の三条実美であったが、実質のトップは岩倉であり、実務のトップは大久保であった――ミコシは軽くてパーがいい･･･何たる日本的体制！）、副使に参議･木戸孝允、大蔵卿･大久保利通、工部大輔･伊藤博文、肥前出身の外部少輔･山口尚芳を据え、彼ら明治新政府首脳と随員含め総勢 46 名で構成された。『米欧回覧実記』は使節団書記官で肥前出身の久米邦武により編纂され明治 11（1978）年に刊行された。使節一行の詳細が時系列形式で記録されていている。岩波文庫に復刻版全三巻が入っている。

一行は、まず、太平洋を渡りサンフランシスコへ上陸。鉄道で米大陸横断し、東部の主要都市を巡って、今度は大西洋を渡る。英国を経て、フランス、ベルギー、オランダを訪問して、ロシアへ至る前、一行が欧州における最重要目的地としていたのが、ドイツである。明治 6 年 3 月 7 日にデン･ハーグ発、エッセンを経由して、9 日にベルリンに入っている。ベルリン発の 3 月 28 日まで、約二十日の滞在である。その間、皇帝ヴィルヘルム 1 世の謁見受け、宮殿での会食、さらにビスマルクの招宴に臨むとともに、諸機関、諸施設を見学している。

この岩倉使節にとって、このドイツ訪問がハイライトであったのは、ロシア訪問前の、実質、欧州における最後の訪問国とされていた単なる日程上のことからくるのではない。ほんの数年前の 1871（明治 4）年、諸連邦に分かれていたドイツをプロシア主導で帝国として統一したことが、幕藩体制から統一国家へと脱皮したばかりの明治日本にとって、ドイツこそが最も適切な近代化モデルになると考えられていたからである。普仏戦争の結果を受け陸軍兵制もドイツ式を採用、医学もしかりだが、英国をモデルにした海軍を殆ど唯一の例外にして、明治日本は近代のモデルをドイツから移入した。このくだりは「ドイツへの片思い」の項でも述べた。

一行を待ちうけていた帝国首都ベルリンは、彼らが見てきたロンドンやパリとは些か趣が異なるまちであったろう。ベルリンは 13 世紀が記録上の初見というから比較的あたらしい都市なのである。この辺境の田舎町が急速に発達するのは 19 世紀のことで、1871 年にドイツ帝国の首都とされるに及んで一大帝都としての殷賑を極めるようになる。

ハイライト中のメインイベントは、3 月 12 日午後にあった皇帝への謁見でも、宮中の付帯セレモニーでも、モルトケ――参謀本部の制度を創設した――との会談でもなく、一行への印象という点では、ビスマルクの招宴であったろう。当時、外相を兼務していた宰相ビスマルクが一行を招待するのは 3 月 15 日夜。朝来の雪は止んで、午後から天候は回復していたという。回覧実記の編者である久米は宴席におけるビスマルクの演説を詳細に記録している。何しろプロイセンを主導して、統一ドイツ帝国をなさしめた鉄血宰相の名はつとに高かったし、新興ドイツの工業力を背景にした剛勇の外交手腕は欧州政界の台風の目でもあったから、使節団一行はこの英雄がどんなことを喋るのか興味津々であったに違いない。宴は宮中のそれとはちがってくだけた雰囲気だったようだ。ビスマルクは、自らの生い立ちから語りはじめ、次第に弁舌は熱を帯びていった。彼は、「万国公法」をもって正義が行われると思うな、国と国との関係を決するのは、高邁な哲学でも国際法でもなく、力の行使なのだと言う。ときは帝国主義の時代の只中にあった。弱小国――小国は孜々として国際法――万国公法を守ろうとし、また他国が遵守することも期待するけれど、大国は自らの利があるときだけ尊重し、利なくば兵威をもってこれを踏みにじる。弱肉強食の欧州国際政治の中で危うい間隙を泳ぎ抜いて、小国プロシアを大・ドイツ帝国へと導いてきた「稀代の英雄」もしくは「乱世の梟雄」自らが説くだけに実に説得力があった。力に裏付けられた冷徹なリアリズムだけが頼るべきもので、法の支配だの、話し合いだの甘っちょろい幻想を抱くことなかれというのは、平和惚けした現下の日本人には通じないかも知れないが、当時としては常識であったろう。要するに、富国強兵を国家主導の下で行うことが、帝国主義の世に棹さしていくには、いちばんの近道なのだという。ハナから民主主義でいって（当時であれば共和制）、これから近代を目指そうという後進国を豊かにするなど出来ない相談で、途上国にあって開発独裁が効率的であることはいまだ帰納的事実である。このビスマルクの言明がそのまま現在に当てはまるわけではないが、彼の言った大国そのままの意識の大国が現下も存在することは不幸と見なければならない。145 年の歳月は人類に歴史の成長を許すわけだ

が、過去に学ばぬ者もいる――過去に学べと声高に隣国を難じる張本人が最も学んでいないとのアイロニーをかの連中は気付いていない。

副使の木戸も大久保もビスマルクのスピーチに非常に強い印象を受けた。と云うよりも毒気にあてられたと云うところか。特に、大久保は新たな国家を建設し、その経営を軌道に乗せるためには、彼の如く鉄の意志をもって取り組まねばならないと深く頷くところがあったという。大久保にとっては、米国、英国を知ることも重要であったろうが、やはり実見したい一番の国はドイツであったと思われ、実際、そう人にも書いて寄こしているし、目的を達したドイツ訪問のあとには、日本からの召還命令を受けて、3 月 28 日にマルセーユ経由で帰国の途についている――これは彼らの不在中に西郷を中心に廟議が混乱し、外交問題にも発展しつつあった、所謂、征韓論をめぐる政治状況がのっぴきならなくなって、急遽、大久保を呼び戻すことになったからである。木戸もロシア視察後の 4 月 16 日、同じ理由で使節団を離れて単独帰国の途につく。

が、彼ら一行はドイツを無批判に受け入れたのではない。そこはさすがに明治を興した志士の世代だけのことはあって、昭和期陸軍軍人のようにドイツ起源のものは全て正しいと思い込む阿呆な盲従の気配はない。まちの隅々の些細なことにも目を配り、批判の眼差しを向けている。

ベルリンという「新興ノ都」ではドイツ帝国の成り立ちの経緯からしてやむを得ないのだろうけれど、非常に軍人が威張っているのに顔をしかめている。軍人の予備軍である士官学校の生徒たちが、粗暴な態度で跋扈し、休日ともなると公園で酔いを帯びて高吟朗語し、酷い奴はあたりに糞を垂れ散らすとある。まるで若衆なみの乱暴狼藉ぶりである。なるほど、強兵で富国が達成できても、野糞だらけでは困る――尤もである。彼ら若き明治人は、後世、昭和期の陸軍軍人たちが、野糞を垂れるだけならまだよし、まさか、国家を乗っ取ったあげく、神輿を担ぐように、国そのものを噴火口にたたき込むような愚行をしでかすとは想像だにしていない。

ベルリンで大久保、木戸に強烈な印象を残したビスマルクは、1898 年満 83 歳で没するまで長命する。彼は、彼の崇拝者はいるが、友人はいない、といわれる孤独な政治指導者であったが、巨星、稀代の英雄であったことは間違いない。数々のアフォリズムを残したことでも知られる。よく人口に膾炙している「賢者は歴史から学び愚者は経験からしか学ばない」は竹下登の座右の銘だったらしい。

わたしは寧ろ晩年の名言にこそ、彼の陰影に富んだ人柄を感じる。曰く――わたしにもこれから先、ただいちどだけ幸福な日が来る･･･それは、寝て、ふたたびさめぬ日だ――なるほど、そうかもしれない。

（Sep.17. 2016）

ドイツの鉄道

オーストラリアに住む米国人から聴いた小咄――その昔、会津大学に勤めていた折、朝 10 時の辞令交付式にぴったり会場に行ったら、事務にこっぴどく叱られたのを茶にして曰く、平然と決められた時間より 5 分遅れてやってくるのが英国人、その時間ぴったりに現れるのがドイツ人。で、日本人は 5 分前にやってくる･･･。

旧ソ連での小咄――あるとき、集団農場の作業開始時間に 5 分遅れてやってきた者がいた。そいつはサボタージュと看做されシベリアのラーゲリ（収容所）送り。5 分早くやってきた者は、スパイに違いないとされ、これまたシベリア送り。で、丁度その時間に来た者は、日本製の時計を持っているに違いないと疑われ、身ぐるみはがれた･･･。

こう云ったはなしは枚挙に余るほどあるだろう。どれも時間に正確な国なり民族なりの筆頭にあげられるのが日本人でありドイツである。欧州でも南の方や UK はいい加減だと認識されている。これは印象にも、けだし実態にも合っているように思う。近代を推進した UK が時間にルーズとの印象を持たれているのは、戦後の英国病に代表される労働組合の跋扈と英語圏故のグルーバル化が本稿主題のドイツより先んじて起きたことによるのだろう。イタリアでは、1 時間遅れなど当たり前で、ある中央駅で駅員にくって掛かっている紳士がいうには、出発時刻 30 分後にやってきたら、列車は 5 分前に出た後で、けしからんじゃないか云々。嘘かほんとか疑わしが、言い得て妙だ。ニューヨークとワシントン DC 間のアムトラック以外の米国やカナダでは、鉄道は年老いた金持ちの観光客が乗るもので、時間遅れなど気にされちゃ困るとの雰囲気がある。バンフからバンクーバーまで大陸横断鉄道に二度乗ったが、一度は半日遅れだった。遥か東のモントリオールからやってくるのだから遅れが蓄積するのは判るけれど、それを少しでも取り戻そうとの発想はまるでない。

ドイツ人は勤勉、生真面目、時間に正確とされているが、この常識が今次の滞在で覆された。少なくとも、列車ダイヤに関しては、かなり酷い。

ベルリンとハンブルグ間の Inter City Express（ICE）をよく利用する。在来線と同じ軌道を走るが、日本と異なり狭軌でなく標準軌だから、列車クラスとしては日本の新幹線に相当するだろう。ベルリン近くでは 200 キロでぶっとばす。ベルリンとハンブルグ間を一時間半余りで結ぶ･･･ことになっている。と云うのが、これが時間通りに走ることはまずない。首都圏近くではダイヤ混雑のためか、ベルリンに向かう路線の時間遅れがことに酷い。あるとき 1 時間以上遅れて危うく予定に遅れそうになった。1 時間 40 分の予定を 1 時間遅れられては、もはや特急列車とは云えないのだが、皆わりに平然としている。車内放送で遅れの原因を、縷々、説明することもない。一言、遅れそうだと、それもドイツ語で車掌が宣告する。何しろ他人に謝らない国民性だから、日本のように 1、2 分遅れても、くどいくらいに車掌さんが丁寧なお詫びの弁を繰り返すなんてことはない。無論、特急料金の払い戻しなどしない･･･そんなこと、絶対にあり得ない。

こんな時代だから、インターネットで座席指定を含めた切符の手配が手軽に出来る。事前割引は可成りの割安になる。当然、ダイヤ通りを前提に、出発地から目的地までの接続が決められる。これがくせ者だ。10 分、20 分の接続時間があれば、日本ならホーム間を這っていったって余裕で間に合うが、ここではまま乗り遅れる。気が短い割には小心者の私などは、駅に着く前から列車中を駆けずり回り、着いて扉開くや、俄然、短距離走のモードになる。が、五十過ぎのおっさんだから、すぐに足が縺れて息切れる。接続失敗は一再で済まない。

昔はこんな風ではなかったらしい。勿論、東欧から越境してやって来る国際列車が数時間遅れるなんてことはよくあったが、少なくともドイツ国内の列車ダイヤは正確だったという。それが、ここ十年ほどで酷いことになってしまった。10 分以内の遅れはダイヤ通りと看做す、とのにわかに信じがたい彼ら独自の計量法を適用しても、今やダイヤ遵守率は目を覆うような体たらくで、ことに長距離列車でその傾向が著しい。Deutsche Bahn（DB）が民営化されたこと、EU 内の物カネ人の流動が自由になって、ローカル線運営を入札で民間委託する際、ドイツ以外の企業が参入するようになったことも理由の一端にあるらしい。民営化云々は、日本の JR を見てもわかるが言い訳の事由にはならないだろう。

これは、単にドイツがかつて誇ってきた鉄道技術なり文化の変容という以上の意味があるように思われる。EU の理念のもと、欧州内はもとより、トルコ移民や最近はシリア難民など、大量に圏外からドイツへと人々が押し寄せるようになった。繰り返し述べてきたが、EU の最大のメリット享受者はドイツに外ならないのだが、それに伴うグローバル化の影響もそれだけ深刻に被ったのもドイツなのだ。その民族集団が、国柄からくる伝統の中で培ってきた文化なり社会システムなりが、グローバル化の名の下におきる統計力学的社会エントロピーの増大に晒されれば、それらが平均化され、よい意味での特徴が損なわれていくのは、理路の当然だろう。このあたりは先進国の中にあって、唯一、非西欧で、言語文化が殆ど異星人なみに隔たっている（蛇頭はじめ悪党一味が密航してくるくらいで、周辺から移民がわんさか押しかけるなんてことは起きえない）日本人には実感として理解しがたい（グローバル化のかけ声は、大学はもとより社会のどの界域でもかまびすしいけれど、帰結は良いことづくめではないことを私たちは知るべきかも知れない）。

今ひとつ感じるのは、鉄道という西欧起源の社会システム――あるいは文化と云ってよいかと思うが――は、日本に導入されて、その後、特異な進化を遂げたのではないかと思われる点。そもそも、鉄道とは多少の時間遅れは当たり前で、日本の感覚で云えば道路事情で遅れもするバスのようなモンだとの理解なり常識なりが、こちらの人には共有されているように思われる。だとすると、私たちは当たり前のことだと思っているけれど、1000 キロに及ぶ距離をほとんど寸分違わず時刻表通りに運行されている新幹線など、彼らの理解を遥かに超える社会システムなのだろう。狭く閉じられた島国の中で、箱庭か盆栽か、いずれにしろ、兎に角、丁寧にきめ細かく手を加えていく私たちの文化スタイルが、元々からすると異なったシステムへと改良発展させる･･･しまいには名は同じでも実はまるで異なったものになっている、というのはあり得そうなはなしだ。ガラパゴス化も莫迦にしたもんじゃ

ない。随分とつまらぬ喩えだけれど、Baseball が 100 年前以上に移入されて、大元の米国のそれとは異なるスポ根ものの「野球」へと進化したように。

日本から持っていったノートパソコンをハンブルグとベルリン間 ICE の一等車に置き忘れた。気が付いてすぐ――終着駅のベルリン中央駅に到着 2 時間後くらいに、なんとか見つけてくれいと談判に行ったが埒があかない。日本なら、回送中の列車に専用電話なりを入れてすぐ見つけてくれそうなもので、おそらく新幹線ならほぼ間違いなく戻ってきたろう。中央駅の窓口では逸出物届けを提出して、同時に web のデータベースに入力しろ、だのと云ったマニュアル通りの応対しかしない。ベルリン管内の逸出物センターにも行ったが、大同小異。爾今の仕事に差し障りが出ると青くなった私は、ベルリンから Arne に、余っているパソコンを使わせてくれと緊急電を発した。Plön に帰った翌朝、研究所の自分のオフィスに行ってみると、既に私のネットワーク ID で設定済みの PC が机上に置いてある。水も漏らさぬ完璧な仕事っぷりに驚いた。Arne が私の不在中に研究所の技術スタッフに指示してくれたからだ――彼自身は出張でいないのにも拘わらず。Arne 個人の人柄か、Max-Planck の組織体制の素晴らしさなのか、そのいずれもあるのだろうが、お粗末な鉄道ダイヤや忘れ物対応を実体験した後だったので、余計にドイツ流の頑強な社会システムいまだ健在なりを垣間見たようで嬉しくなった。

（Sep.24. 2016）

長らくご愛読いただいた『独逸日乗』も本号が現地からの最終稿。

けだし海外暮らしはこれが最後になるだろうと思いつつ、愛おしむように豊かで恵まれた一時一刻を過ごしてきました。実りのある時間に恵まれたあとに感じる一抹の寂しさを一人感じながら、明日このまちを出て行くと云う最後の夜にこれをものしております。

皆さんの迷惑を顧みず配信してきましたが、時折、下さる返信や感想は嬉しいもので、大いに励みになりました。今回は前期大学院講義の期末試験が不出来の者への救済措置として、感想文を毎週送って寄こせと申し置いておいたので、余所の研究室の学生も読者でありました。さて、どこまで伝わったんだか･･･。今週の歴史のハナシは難しくてよくわかりませんでした～、来週はいつだかのハイキングみたいに楽しい噺を期待してま～す･････ってのもいました。大学の先生も大変です。海外に出ると言葉の壁に阻まれ、言語について敏感になるものですが、同一言語内世代間言語障壁とでもいうのか、同じ日本語で書いていても通じないってのは、一体どういったことなんでしょうか。語学を勉強している（ことになっている）豚児は、当方のレポート内容に些か関心もあろうかと親の欲目もあって期待するわけですが、読みましたなんて書いて寄こすわりには、直接問いただすとまるで読んでないことが判明。アホ子豚児の親も大変です。まぁ～ねー。確かにちょっとヘンな日本語ですし、書いてあることは相当にイカれてますから･･･。彼女含め、また例の繰り言かと委細よく知る我が学生たちは、着信即座にゴミ箱送りで、適当にやり過ごしていたでしょうが、よその学生さんにすると、こんな身近にこんな具合に気のふれたおっさんがいたとは意外だったかも知れません。向後、キャンパスで会っても目を合わせくれないのではないかと心配しています。

さて現地最終回ですが、何を書くか･･･。

最も書きたかったことを書くわけです。

毎度のことです。あれです。そうです。おきまりです。お約束です。僕の唯一無二の専門領域。――恋　愛　小　説。

右翼反動のことだから、さぞかし時代がかった、さながら玉砕前に大本営に送る袂別（べいべつ）電のようなものだろうと思った方はなかなかに鋭い。圧倒的物量をもって二日で片付けるつもりでやって来た米軍を二ヶ月以上も釘付けにしたペリリュー島の戦い――陛下から十一度の嘉賞、上級司令部から三度の感状を受けた歩兵第 2 連隊基幹独立守備隊々長の中川州男（くにお）陸軍大佐（戦死後、全軍布告二階級特進して中将）が自刃後に送らせた最終電（1944（昭和 19）年 11 月 24 日）は――サクラ サクラ サクラ。

湖畔驟雨（創作）

日に一度は降る俄雨はすぐ已んで初夏の陽射しが戻ってきた。

午後の二時には研究所のオフィスから同じ敷地にあるバンガローに引き上げてくる。客員用の宿舎は四棟あって、いずれも Schöh 湖へ下るなだらかな斜面に面している。青葉が茂る夏のあいだは、吹き抜けのリビングから湖面は見えないが、湖畔はすぐそこにある。此処（ここ）にやって来て三日目の午後、二棟先のバンガローで長身白髪の老人を見た。湖面に向かって設けられた大きなテラスで、手摺りの天板にパソコンと赤ワインに満たされたグラスをおいて、白い陽光を背中に浴びながら何か仕事をしていた。他の客員教授だろうか。

テラスに向かって大きなガラス窓がきられたリビングに机と椅子がおいてある。そこで暫く仕事をする。と云って本当の仕事はしない。Traulsen 教授と議論したモデルのことを考えていた。ネットワーク互恵に間接互恵を埋め込むと協調創発の確率 resonance 効果が強化されるか、あるいは意外に負の干渉をよんで減退するのかを観ようとのアイデアである。日本の研究室にあるワークステーションで計算させている。その結果が気にはなるが、それは明日またオフィスに出てから見ることにしよう。

キーボードを打つ手を止め、ふと画面から眼を上げて外を見ると、テラスのすぐ向こうで野性鹿の親子がのんびり草を食んでいる。

母鹿と目が合う。

暫くじっと私を見ていたが、おもむろに傍らの子鹿を促して、湖に向かって斜面をゆるゆると降りていった。眼に狂気の光を見たか。

たしかに彼らにとってヒトほど恐ろしい生き物はいない。思索のうちに数を、表式を、形而上的概念を、言語をすら表記する。あらゆる現実世界の事象を表現し、それを演繹推論する無限の知識体系をしっている。それを彼らは mathematics とよぶ。ただ一度作られ証されれば不易の知となり、更新不要で蓄積され、拡大してゆく。いかなる科学も為し得ないメタ概念。——哲学。いや思想そのものである。その大系の末端に畜類どころか同じ人類をも瞬時に数百万人殺戮する技術すら生み出した。これを狂気と云わずして、なにを癲狂（てんきょう）とするのか。

テレビの英語放送では、先週、ニースで起きたテロの続報をさかんに報じていた。

Traulsen 教授は Jorge を次世代の Nowak 教授になる逸材の一人だと紹介した。

毎週水曜日の文献輪読会で、今流しているシミュレーションの結果が期待通りにならないことをぼやいたことがあった。Jorge はそれを聴いただけで、その理由は、初期一様分布で空間配置を与えていることに問題があるのではないか、エージェントのランダムネスが独立事象で重畳される特性からして、2 項分布を与えないとうまくいかないのではないかと見破った。彼の言う通りだった。数年前、Trondheim であった国際会議で私は彼と会っている。企画した「進化ゲームとネットワーク」の特別セッションで、彼は採択した講演者の一人だった。当時、Lausanne 大学の博士課程学生に過ぎなかったが、Jorge の統計物理学の智嚢は並み居る情報科学者たちを圧倒していた。その後、彼の論文を一流誌でちょくちょく見

かけるたびに、深い知性を湛えた青い瞳を思い出した。それが、Max-Planck でポスドクをしているとは、世界は狭い。

この秋から、Boston へ移るのだという。Harvard の Nowak 教授のグループと云えば、世界最高峰で、そこのポスドクは数理生物学を志す若者にとって憧れの登竜門である。無論、Traulsen 教授の推挙もあったのだろう。スイス、ドイツからアメリカへ･･･母国コロンビアを離れて爾来（じらい）十年になると云う。言語も文化も懸隔のある日本人にはおよそ想像できないが、流れの向こう側にいる彼らにすると、国境など関係ないのだ。国籍、人種、思想信教も人を峻別する ID としては大きな意味をもたない。尤も、それは才能があればの噺だけれど。

この国の夏は、日本の蒸し暑さとは無縁である。盛夏は夏至を挟んでの前後二週間。気温は 20℃を超える程度で、たまさか一日、二日、30℃を越えることがあっても、日陰は涼しい。それを過ぎれば、八月は夏と云っても肌寒い日もある。蝉の声とうだる暑さが遠い昔のことのように思い返される。英語もそうだが、ドイツ語の語彙には、元々、夏と冬しかなかった。春と秋は中世になって出来た言葉だ。言葉は時代とともに移ろう。二人称 Sie が du の丁寧表現となるのは、中世の騎士たちが三人称単数代名詞、英語で言う he/she に相当する Sie を、相手を前にしての婉曲表現人称代名詞として使い始めたからだという。

夏と冬の二値的（バイナリー）な季節認識は、斯様に過ごしやすい夏の向こうに、雪と氷で閉ざされる暗くて長い冬がいずれやってくることを暗喩している。それらを本能的に知っている彼らは、つかの間の夏を心ゆくまで楽しむ。その態度は徹底的で余念がなく、異邦人には享楽的で刹那的にすら視える。かのイソップ寓話は、夏に対置される厳しい冬、否、冬の過ぎ去った後に訪れる快楽の夏、との二値的文脈があって成立したに相違あるまい。夏に偸安を貪ったキリギリスに対して、冬への準備におさおさ抜かりのないアリ。勝者はアリで、敗者はキリギリス。キリギリスはアリから一切を学ばねばならない。明部と暗部の二分法は、夏冬の対蹠から引き出されたものだろう。この教訓めいた噺の集積が、この地に近代文明をもたらしたことは認めねばならない。そして、その近代は、他邦の多くの人々に物質的豊穣という意味での幸福をもたらしたことも認めねばなるまい。少なからぬ悲劇があったことを確認した上で。こうして創られてきた近代は、中間を許さぬ二値の明暗に物事切り分けることで成り立っている。飛行機が突入して崩壊したビルの瓦礫を前にした大統領が、悪は罰せられねばならない、と演説していた。あれは一神教同士の対立とみるべきではなく、明部は、暗部があるかぎり、それを追い詰め、陰のない白光で埋め尽さずにはおかないとの真理から来ていたのではないか。行き着くところ、明部は暗部を征伐せずにはおかないのだ。

私たちは万葉の昔から、春夏秋冬の移ろいを愛でてきた。夏の暑さは確かに厳しいが、それも束の間、やがては錦秋の刻々が巡ってくる。黒白と明暗の二値ではなく、その中間も、そのまた中間も、すべて許す限りは許される。彼らは、それを曖昧といい、不分明だと難じるだろうが、切り分けぬからこそ視える妙味というものがある。自らを二分法の裁定者の高

見に据えるのでなく、自分も人も、生きとし生けるもの全ては、自然により活かされているとの現実を受け入れる謙虚さがなくてはならぬ。
　斯くして、漸く、まほろばの日本に還ってゆく自らを取り戻す。

　Silke は、昨秋、Georg-August-Universität Göttingen で経済学の学位を取って、ここでポスドクのキャリアをスタートさせた。クラスタ近似とペア近似に関する統計数学の遣い手だという。Silke とはラテン語起源の Celia――天国からきている。ゲルマンの女性名として、まま見かける。ドイツ人にとって、東方への憧れを意味する Silk とは直接関係はないのですが、名前を付けた父にはどこかに連想が働いていたのかも知れません、と彼女は薄くわらった。Silke にはどこか日本女性を彷彿とさせる雰囲気があった。諸事に控えめなこともあったけれど、碧眼金髪だがドイツ女性としては小柄なことも私の想像をかき立てた因であったかもしれない。此処にきた最初、プリンタードライバーの設定が判らず、四人部屋で一人ぽつねんと仕事をしていた彼女に尋ねると、懇切丁寧に教えてくれた。言葉も宗教も何もかもことなる異邦人に興味でも覚えたか。喩え、それが、子供が未知の小動物に触れてみようとする好奇心ともと同根のものだとして、何ほどのことも思わぬ。何かを感じるには私は歳を取り過ぎていた。が、後、それは私の偏頗（へんぱ）な先入観からきていたことがわかった。父親の影響で、彼女が日本への強い憧憬の念を抱いていることを知ったからだ。茶道へのあこがれから緑茶をあれこれ試していると言う彼女が示した茶箱に福建産の文字があったからとて、それを欧米人にありがちな Sinology と Japanology の混同と嗤うまい。あるとき思い詰めた表情で、詫び寂びとはどんな思想なのか教えて欲しいと尋ねてきた。Immanuel Kant に始まり、Georg W. F. Hegel に完成する観念論をどこまで理解しているか問うと深くはないと俯いた。日本人でも詫び寂びの真誠（しんせい）を理解している者は多くない、粗末な私の解釈と言葉で、あなたの大切なイメージを壊してしまうことは避けたい、と逃げ口上をうった。半可通な知情意（ちじょうい）では、到底、伝えられない。黒白と明暗で物事切り分けようとする唯物論者たちに、その間に無限なる饒（ゆた）かさの存することをどう伝えればよいと云うのか。

　夏の盛りは短い。九月のこえを聞くと、俄雨が多くなり、天候にも饗宴あとのうら寂しさが漂う。冬はもうすぐそこまで来ている。
　わたしは研究所の玄関で立ち止まった。アネクスへと続く緩徐とした登り坂を途中で左に折れるとすぐバンガローだが、どうしたものか･･･。
　先ほどまで日照雨（そばえ）だった降りが、昏い雲に天空一面覆われたかと思うと、見る間に篠突く雨になった。自室に傘を取りに戻るか、ほんの僅かの間濡れていくかを思案していると、坂の上のアネクスから一気に坂を駆け下ってくる女が見えた。すれ違いざま、かんばせを上げた濡れ髪から、あたりに黄金色の滴が飛び散った。女は泣いていたのだと思う。その残像が後々も私の記憶に揺曳（ようえい）して忘れられない。

Silke は、そこに佇立するのが私だと認めて、貌を上げたのだろうか。言葉も宗教も常識も全てことなる異邦人に何をうったえたかったのか。
坂上のアネクスの玄関には、傘をさして一人たたずむ Jorge がいた。二値である以上、一方でなければ背理の必然として、他方の帰結に至らざるを得ない･･･。
何かが静かに終わる刹那に立ち会ってしまったらしいことを私は諒解した。

このことを後日雑談で話題にすると、Traulsen 教授は手を広げて天井を見上げた。「若者にとって夏は恋の季節。そして夏はやがて終わり、冬が巡ってくるのが理路の必然･･･」謹厳な数理生物学者の口から意外にも詩の切れ端のような言葉がもれた。そのとき、数学と詩はもと同根のものであることを識（し）った。数学も詩も全て、彼らの云う神の存在を仮構した演繹の帰結だったのか。
湖面を望むブラインドから漏れる陰のない光が所長室の隅々まで照らしていた。それがまるで彼らの文明の表象であるかのように。

散りゆく花は静寂とともに深く刻印されている――それは遠い昔のこと。
流れゆくわずかな息に揺蕩（たゆと）うて、音もなく散ってゆく――サクラ、桜、さくら――落花は無音をともなって。
静寂は無音の破れた果ての姿だと云う。本当は騒がしい。耳を聾するほど騒がしい。その騒がしさに紛れて、包み隠してきた言葉を吐き出してしまえばよかったのだ。――自分も。――相手も。背景に掻き消されて伝わらぬこともあるだろう。が、どうせ無に還るのだから、何ほどのこともあるまい。吐き出さずに在りもしない残像を抱いて過ごすより、よほどましではないか。
若者は、相手を所有せんとする衝動と情欲とにせき立てられ、ゲームにあっては他者より一分一厘でも多くの payoff を獲得しようとする。適者生存と優勝劣敗の原理は、勝者と敗者の平明な二分法により裏付けられている。そのことは彼らの創り上げてきた文明と何ら背馳することのない理（ことわり）。
およそゲームである限り、それにのってみないことには嘶にならない――私は永らくそんな風に考えてきた。――若さの過信。たとえ一度（ひとたび）そのゲームに敗れ去ったとて、失着の中には汲み取るべき経験智が埋もれている。それを掬い取って、次回に向かうからこそ、今日を明日に繋ないで、未だみぬ勝利を夢想できる。私は長らくそんな風にして生きてきた。――若さがもたらした錯倒。
しかし、考えてみるがいい。
仮に他者を排し、その相手の所有が全うできたとて、その先に何が視えるというのか。肉の交歓に刹那の愉楽を観たとして、それが永続することなどあり得はしない。自らを相手の身体に分与し、引き替えに相手の情念も肉も所有できたとして、相手と自己との唯一完全な同一化が達成されるなど幻想に過ぎぬ。すべては空に還るのだ。

ならば、その度しがたい所有の欲求など捨ててしまえ。
黒白明暗の二値で象（かたど）られた有形物など捨ててしまうことだ。形あるものは滅びの運命を免れぬ。吐き出さずに、呑み込んでしまうことだ。捨てることで、永遠に所有することができる。

わたしは Jorge と Silke に何を伝えたかったのだろう。

形あるものはやがて滅びさる。何ごとか有形の証を求めるのならば、恋も愛も例外たり得ない。若者よ、愛に形象を追わず、無形の中に二値に尽くせぬ拡がりを、無形の無限をこそ追い求めよ。
されば、繋がりは永久（とわ）のものとなる。
それは、肉の繋がりより遥かに強く揺るぎないものとなる。

> Make the most of your courting days, you young chaps, and keep clean, for they're about the only days when there's a chance of poetry and beauty coming into this life.
>
> H. Lawson　"Joe Wilson's Courtship"

> 若者たちよ、求愛の日々をできるだけ大切にせよ。そして、それらの日々を汚れのないようにすることだ。なんとなれば、この人生の中に詩や美といったものが入り込んでくる望みのある時期といったら、それらの日々を除いて他にないといってもいいのだから。
>
> H･ローソン　『ジョー･ウィルソンの求愛』

（Sep.27. 2016）

※次回、機上からの跋文をもって最終回です。

跋

夢のような日々であった。まだ三途の川を渡る気がないのなら、いくら心地よかろうと夢はいつか醒めねばならない。帰れば現実が待っている――邯鄲の夢か。

何とも贅沢な一夏の滞在であった。これまでの海外暮らしは、規模の大小はあれども、いずれも都市居住だった――少なくとも今回のような邑居（むらい）の生活ではなかった。滞在先が大学となれば、自ずとそうなる。その意味で、今回の Plön での三ヶ月は得がたい経験になった。西欧社会の本当の豊かな生活を垣間見ることが出来たと思う。アメリカ型の豊かさ――究極の物質主義と手付かずの大自然とに裏打ちされた豊穣さとも一線を画す、自然と歴史伝統文化、それに人為とが三位一体、混然となって醸されたヨーロッパ流の豊かさ――欧州にいまだ存する、蓋しアメリカ人も羨むであろう（実際、短期滞在していたカナダ人が新大陸にもない豊かさとの管見に深く頷いてくれた）、彼らうちでも本当に本当の豊かさというべきもの。これは、皮相を掬った経済指標などでは推し量ることは出来ないものである。

そして、それを識（し）ることとは，ある部分で未だに彼我にある大きな落差――日本の貧しさを再認識することでもあった。勿論、西欧社会にはない、わが日本の豊かさ、素晴らしさをあらためてかみしめる機会にもなったわけだが。

彼我は圧倒的に異なる。この稿でも何度繰り返し述べてきたことか。

毎度、海外暮らしをする度に自分を碧い緑の地球に紛れ込んだ火星人のようだと感じる。

この彼我の乖離は埋めようがない。物質的な意味での立ち後れなら追いつきようもあるし、表層の価値観常識の違いならば学習し理解して取り入れることが出来るかも知れない。が、ここで云う懸隔とは凡そそれらとは別物で、どう足掻いたって、その溝は埋まらない本質的違いなのだ。途上国がやってきたように（あるいは現下しているように）、社会のしつらえも、ハードもソフトも総て初期化して、丸ごと真似るのならなんとかなるのかも知れないが、それはそれで、まがい物はお手本を決して越えられないとの真理に阻まれる。

この違いは埋めようなどとは思わないで、違うことを知って、わたしたち日本及び日本人がそれに代わる何を創成できるか考えるべきなのだろう。近代文明を作り出したのは彼らだ。後から追いかけて来た者がそのヘゲモニーを簒奪できるとは考えにくく、この近代文明がおかしくなるときには人類が丸ごと倒れるのだと思われる。その近代文明は確かに私たち人類を物質的に豊かにしはしたが、万能ではなく、300 年以上の時間が経過してあちこちに綻びが目立つようになった。近現代を一言で丸めると、事々すべてを平均化し普遍化するプロセスであり、その過程で達成される効率性の飽くなき追求の時代と云うことが出来るだろう。言葉（英語）も文化（西欧文明、自由と民主主義、物質的豊かさ、アメリカニズム etc）もそうだが、たれもが参加できる手軽さと均質性は過去にはとてつもない利便を人類にもたらしてきたが、昨今のグローバル化はいろいろと厄介な問題をはらんでいるように

見える。ときに暴力的な turbulence を生むグローバル金融や難民問題、テロの脅威、いまだなくならぬ貧困、一隅に根を張る暴力と覇権主義、そして環境問題――どれも西欧起源の近代文明がもたらした社会エントロピー増大が行き着いた果てに顕れた事どもではないか。私たちは、いま、文明の踊り場に立たされているのだ。

日本及び日本人は、このグローバル化から最も遠く取り残されている。偸安の快を貪っているとまでは云わぬが、それ故、割に平安でいられる向きもある。が、少なくとも、グローバル主義なりグルーバル化の波に乗り遅れることを、私たち自身は憂慮すべき問題だと考えている。自己を異星人だと認識する裏返しとしてのマジョリティへの同一化欲求は根強い。つま先立つようなその思いは、ときに切ない。

私たちは確かに彼らから大きく異なっている。だが、よくよく考えてみると、近代文明の本質という点で彼らとは異なるアプローチながら殆ど同等の高いレベルでそれに沿った社会を構築している唯一のモデルであることに気が付く。その根っこには、グローバル化とは対極の、島国故の閉鎖社会――進化ゲーム理論ではこれを社会粘性という――という特殊事情が育んできた均質性の高い協調的社会システムがある。これは、ことによると私たちだけが有するとてつもなく大きな advantage なのかもしれない。ある人はガラパゴス化と自嘲するけれど、彼らと異なることを、異なっているが故に彼らと異なる社会エントロピー増大レベルにあることを、私たちの優位性に変えられないだろうか。深慮もなくコピペとほぼ同工異曲のグローバル化と叫ぶのでない、Cool Japan だか何だか知らないがマンガ（我が研究室ではマンガは発見し次第、焚書）を世界に押し出すだの軽薄なことばかり言ってないで、何かを創り出せないものだろうか。先輩たちが high tech で築き上げてきた技術的信頼性以外の、価値観の創成という観点で。

我が学生たちよ。これは貴君貴嬢たちの世代への宿題である。

もう私の残り持ち時間は多くない――これから隆盛のときを迎える諸君らのそれに比して。だから、君らに期待したい。

今次の滞在で思い知ったが、人間五十を超えると、取り入れ期はとうに過ぎて、新鮮な感受性は失われてしまっている。本当は私のような old-timer でない、若くも鋭い、それでいて健全なナショナリストこそが海外に出るべきだと実感した。我が学生たちよ――宜しく我が意を諒とし、私をはるか高く、そして遠く越えて、外へと出て征くがよい。

研究室の同僚である萩島理教授と池谷直樹助教、原田明研究院長はじめ総理工や Green Asia の仲間たちには、長期不在で色々と迷惑をかけてしまい、且つ多くのことで助けて貰った。おかげで実りある滞在となったことを深謝したい。ごく当たり前のことなのだが、私づれが一人いなくなろうとも何の問題もなく物事はかどっていく。その様子を遠くから眺め、頼もしく思いつ、一抹の寂しさを感じたことも白状しよう――俺なんて、いなくてもいいんだ･･･。いない方がいいと思うよりマシだと考えることにする･･･既にして、思われているかも知れないけれど。

最後に、今次の機会を与えてくれた German Academic Exchange Service（Deutscher

Akademischer Austauschdienst, DAAD）と日本学術振興会（JSPS）、さらには行き届いた心遣いを賜った Max-Planck Institute/ 進化生物学研究所・所長 Arne Traulsen 教授に衷心より御礼を申し上げたい。滞在中、教授とした議論を一篇の論文にまとめられたことは望外の成果であった。

ベルリンからの機上にてものす。

（Sep.29. 2016）